

南方遺跡発掘調査概報

—山陽新幹線敷設による市道移転工事にともなう緊急発掘—

1971・3

岡山市遺跡調査団

正誤表

頁	行	誤	訂正
例説 3	6	浮写は、の後へ	小野町に入る
6	19	付け代え	付け替え
11	下2	E, 番	E: 番
13	4	250基	約 250基
13	6	G r S'	・を削除
13	22	E, 番	E: 番
17	下6	標による	標による
33	6	1, 土試験	土壤試験
34	下8	安定した	安定していた
34	下4	多量と	多量の
36	10	因難	困難
図版45		前用土器	土器を削除
図版55		左下端	順き右

序

東海道新幹線の開通によって首都東京との精神的距離は大はばに短縮され、わたしたち岡山人にとって少なからぬ影響を及ぼしていることはご承知のとおりであります。

さらに、本年秋には、山陽新幹線の試運転列車が吉備の野を走り、47年を迎えると、いよいよ待望の本格的営業開始とつたえられています。開通後は、岡山・大阪間は、約一時間で結ばれ、東京への日帰り旅行さえ可能という交通革命をもたらすのであります。とくに岡山市は岡山以西開通までは終点都市にあたり、開通後も中、四国の結節地点としての使命をもつことになります。

このように新幹線の開通はわれわれの待望しているところでありますがここまでにいたるには、用地売収をはじめ、設計施工など、関係の方々のご苦労はたいへんなものであったと存じます。とくに文化財保護という立場から考えてみると、開発と保護との調和をどのように図っていくかということが大きな問題であったと存じます。すなわち、新幹線コースならびにその関係地内に埋蔵、その他の文化財があった場合、その保護と開発との調和をどう処置するかということであります。

わが岡山市においても、東から岡山駅にのり入れる直前の位置にあたる岡山市南方蓮田附近は、以前から弥生時代の遺跡であることが知られており、調査をすすめる計画になっていましたが、昭和44年9月、新幹線にともなう市道のつけかえ工事をすすめたところ、地下約2mの層から多量の土器が出土しました。この報告により、岡山県・市教育委員会は直ちに新幹線工事当局とこの遺跡の取り扱いについて協議したのであります。その結果、市街地であるため基本的な設計変更は不可能であるとの合意に達したのであります。しかしながら、この遺跡の重要性という立場から、工事を漸次中止し、緊急発掘調査を実施し、その記録を保存することになったのであります。

その後昭和45年4月にいたる間、県教委の協力のもとに突貫的緊急調査をすすめました。この調査にしたがって多量の遺物が発見され、予想どおり重要な

遺跡であることが判明いたしました。なかでもほとんど完全な3体の人骨、銅剣片、多種類の土器・石器等の貴重な遺物、遺構の発見により、岡山県における弥生式中期の生活を解明する重要な資料を得ることができました。

ここに委託された調査の概要を報告するわけであります、緊急調査の性格から理想的なかたちの調査もできず、限られた人員や時間であったため満足できる報告にならなかった点は遺憾に存じますが、できるだけ豊富な事実資料を提供し、各位の考察の素材にしていただくことを中心にまとめました。

今日は、すでに遺跡も埋没し、その上のアスファルト道路上には自動車がはげしく行きかいっています。再び姿をみせにくいこの祖先の足跡をこの報告書でたどっていただければ幸に存じます。

調査の実施は新幹線当局との接渉の中ですすめたわけでありますが、ご迷惑をおかけした点も多々あったと存じます。これも文化財保護の立場からのお願いであったことをご了承いただきたいのであります。

なお調査についての交渉の窓口として、終始お世話いただいた岡山市役所企画室開発課の方々、調査の実際のご協力をいただいた県教委、ならびに広い立場からご理解をいただいた岡崎岡山市長にたいし謝意を表します。

昭和46年3月20日

岡山市教育委員会

教育長 難波輝夫

例　　言

- 1、本書は、岡山市教育委員会が岡山県教育委員会の指導と助力を得て昭和44年12月1日から昭和45年4月23日まで実施した、南方遺跡内の市道移転予定地部分の発掘調査概報である。
- 2、本書の作成は、岡山市教育委員会が実施し、その執筆は、第一章、第二章、第四章、第五章を出宮徳尚、第三章を伊藤晃、出宮が分担した。
- 3、遺物の整理、実測及び実測図の浄写は、中村義市、堤諭吉、安川豊史、山本雅靖、佐藤敬二郎の諸君の協力を得て出宮がおこなった。
- 4、遺物の写真撮影及び編集は出宮があたった。
- 5、本書で用いたレベルの数値は、海拔絶対標高である。
- 6、南方遺跡の発掘にあたっては、国鉄山陽新幹線岡山工事局、岡山市企画室、下水道部等の多大なご協力を得、深く感謝するものである。

目 次

第一章 周辺遺跡	-----	1 頁
第二章 調査経過	-----	6 頁
第三章 遺構	-----	11 頁
第四章 遺物	-----	17 頁
第五章 まとめにかえて	-----	33 頁

図 版

- 図版第1 遺構①発掘区全景
② "
- 図版第2 第I地点N10灰穴遺構上面遺物出土状況
- 図版第3 遺構①第I地点G r N10灰穴遺構上面遺物出土状況
②第I地点G r N10灰穴遺構底面
- 図版第4 遺構①第I地点G r N10灰穴遺構底面
②第I地点G r N10灰穴遺構底面
- 図版第5 遺構①第I地点G r N10土塚墓群上土器出土状況
②第I地点G r N10七塚墓群
- 図版第6 遺構①第I地点G r N18土塚墓
②第I地点G r N8土塚墓群
- 図版第7 遺構①第I地点G r N5~8土塚墓群
②第I地点G r N5土塚墓
- 図版第8 遺構①第I地点G r N2土塚墓
②第I地点G r N1七塚墓内鹿肩胛骨
- 図版第9 遺構①第I地点G r S12櫛棺
② "
- 図版第10 遺構①第I地点G r S12櫛棺内小兒骨
②第I地点G r S12櫛棺
- 図版第11 遺構①第I地点1号人骨土塚墓
② "
- 図版第12 遺構①第I地点2号人骨七塚墓
②第I地点3号人骨土塚墓

- 図版第13 遺構①第Ⅰ地点1号人骨土塙墓附近土塙墓群
②第Ⅰ地点1号人骨2号人骨土塙墓
- 図版第14 遺構①第Ⅰ地点1号人骨2号人骨土塙墓
②第Ⅰ地点G r S 8土塙墓群
- 図版第15 遺構①第Ⅰ地点G r N 13~17土塙墓群
②第Ⅰ地点G r S 2~5ピット群
- 図版第16 遺構①第Ⅰ地点西G r S 15土塙墓群
②第Ⅰ地点西G r S 15土塙墓群下部
- 図版第17 遺構①第Ⅰ地点西G r S 15上塙墓群（銅劍出土土塙墓）
②第Ⅰ地点西壁北端土器出土状況
- 図版第18 遺構①第Ⅰ地点西壁土器状況
②第Ⅰ地点G r S 12土塙内前期土器出土状況
- 図版第19 遺構①第Ⅰ地点土器出土状況
②
- 図版第20 遺構①第Ⅰ地点G r S 20土塙墓群
②
- 図版第21 遺構①第Ⅱ地点F G H区ピット群
②
- 図版第22 遺構①第Ⅱ地点G H区灰穴遺構
②
- 図版第23 遺構①第Ⅱ地点H区灰穴遺構
②第Ⅱ地点G区灰穴遺構
- 図版第24 遺構①第Ⅱ地点F区方形灰穴遺構
②
- 図版第25 遺構①第Ⅱ地点F区方形灰穴遺構底部
②
- 図版第26 遺構①第Ⅱ地点G H区灰穴遺構
②第Ⅱ地点E区灰穴遺構
- 図版第27 遺構①第Ⅱ地点D区灰穴遺構
②第Ⅱ地点C区灰穴遺構
- 図版第28 遺構①第Ⅱ地点A A'区灰穴遺構土器出土状況
②第Ⅱ地点A区住居址
- 図版第29 遺構①第Ⅱ地点C D区ピット群
②
- 図版第30 遺構①第Ⅱ地点D区土器出土状況
②第Ⅱ地点C D区溝
- 図版第31 遺構①第Ⅱ地点C区古墳時代溝
②第Ⅱ地点D E区遺構状況

- 図版第32 遺構①第Ⅱ地点B区ピット群
②第Ⅱ地点BC区ピット群
- 図版第33 遺構①第Ⅱ地点A区ピット群
② タ
- 図版第34 遺構①第Ⅱ地点発掘状況
②第Ⅲ地点遺構出土状況
- 図版第35 遺構①第Ⅲ地点土器出土状況
②第Ⅲ地点土器溜溝
- 図版第36 遺構①第Ⅲ地点ピット群(南)
②第Ⅲ地点ピット群(南中)
- 図版第37 遺構①第Ⅲ地点ピット群(北中)
②第Ⅲ地点ピット群(北)
- 図版第38 遺構①第Ⅲ地点南ピット群
②第Ⅲ地点中央部ピット群
- 図版第39 遺構①第Ⅲ地点柱穴列
②第Ⅲ地点ピット群
- 図版第40 遺物(土器)
- 図版第41 遺物(土器)
- 図版第42 遺物(土器)
- 図版第43 遺物(上器)南方Ⅱ式模様
タ
- 図版第44 遺物(土器)
- 図版第45 遺物(土器、前期)
- 図版第46 遺物(土器、前期)
- 図版第47 遺物(土器、前期)
- 図版第48 遺物(土器、前期)
- 図版第49 遺物(土器、紡錘車、管玉)
- 図版第50 遺物(分銅形土製品)
- 図版第51 遺物(分銅形土製品、細形銅劍)
- 図版第52 遺物(石槍、石鍬)
- 図版第53 遺物(石庵丁)
- 図版第54 遺物(石庵丁、スクレーパー)
- 図版第56 遺物(石斧)
- 図版第57 遺物(石鍬、石斧、凹石)
- 図版第58 遺物(石鍬、石錐)

挿
図

第1図 南方遺跡周辺地形図	-----	2頁
第2図 2号人骨保存処置作業状況	-----	8頁
第3図 雨天下での作業	-----	9頁
第4図 発掘地点付近図	-----	挿頁1
第5図 第I地点S 12甕棺実測図	-----	タ
第6図 第I地点N 10灰穴遺構実測図	-----	タ
第7図 第I地点N 4~11土塙墓群実測図	-----	タ
第8図 第I地点南壁面実測図	-----	タ
第9図 第I地点東区S 5~17土塙墓群実測図	-----	挿頁2
第10図の① 第I地点東壁断面実測図その1	-----	タ
②	タ その2	----- 挿頁3
③	タ その3	----- タ
④	タ その4	----- 挿頁4
第11図 第I地点西壁S 15土塙墓群実測図	-----	タ
第12図 第I地点N 0~3土塙墓群実測図	-----	タ
第13図 第I地点第1号人骨実測図	-----	挿頁5
第14図 第I地点第3号人骨実測図	-----	タ
第15図 第I地点第2号人骨実測図	-----	挿頁6
第16図 第I地点S 20土塙墓群実測図	-----	タ
第17図の① 第II地点G H区	-----	挿頁7
タ ②	タ E F区	----- タ
タ ③	タ C D区	----- タ
タ ④	タ B区	----- タ
タ ⑤	タ A区	----- タ
第18図 第II地点C D区西壁実測図	-----	タ
第19図 第II地点F区灰穴遺構実測図	-----	挿頁8

第20図	第Ⅱ地点H区灰穴遺構①②実測図	タ
第21図	第Ⅱ地点E区灰穴遺構断面図	タ
第22図	第Ⅱ地点H区灰穴遺構③実測図	タ
第23図	第Ⅱ地点G区灰穴遺構④実測図	タ
第24図	第Ⅲ地点全体プラン実測図	挿頁9
第25図の①	第Ⅲ地点西壁実測図その1	挿頁10
タ ②	タ その2	タ
第26図	弥生式土器実測図	19頁
第27図	弥生式土器実測図	20頁
第28図	タ	21頁
第29図	弥生式土器拓本	22頁
第30図	タ	23頁
第31図	弥生式土器、分銅形土製品	25頁
第32図	打製石庖丁実測図	26頁
第33図	タ	27頁
第34図	石器実測図	29頁
第35図	タ	30頁
第36図	タ	31頁

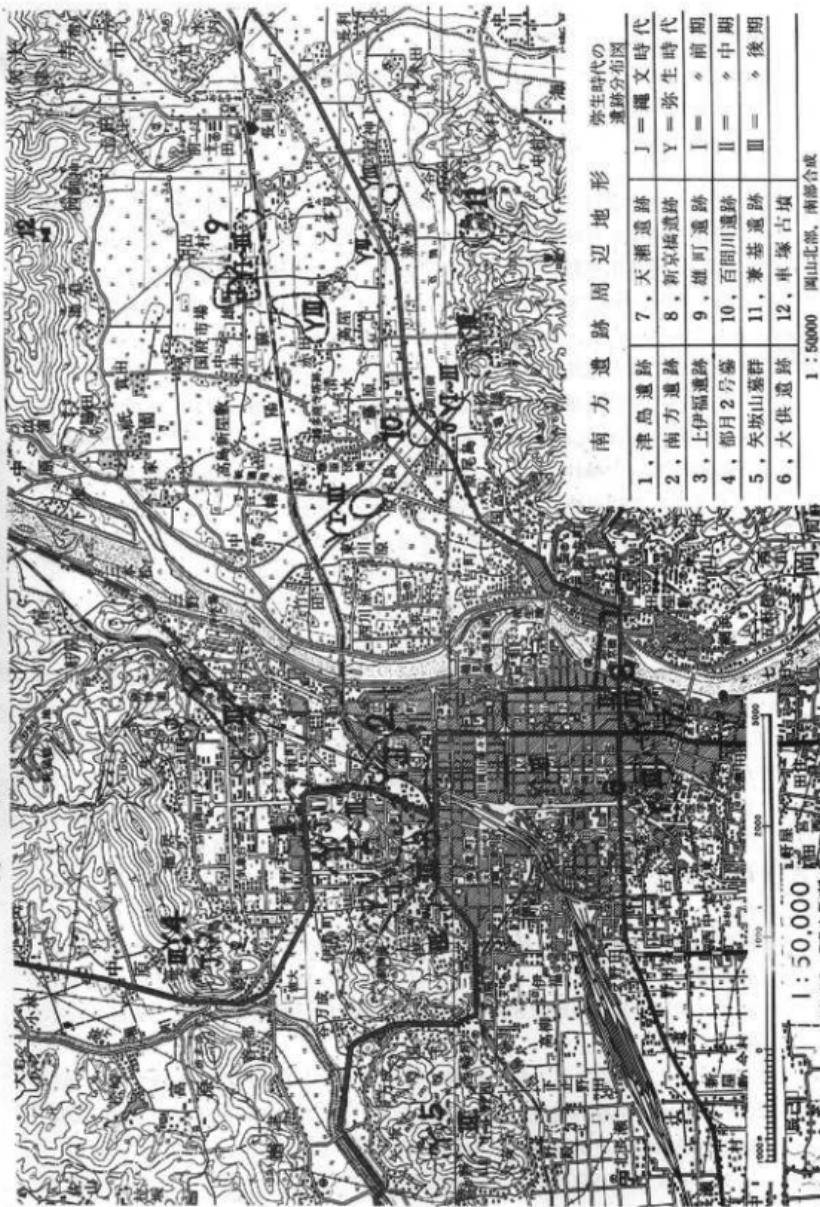
岡山市南方遺跡は、旭川西岸冲積平野部に弥生時代中期を中心に形成された遺跡で戦前から注目を浴びていた。これまで遺物の発見された土地の字名ごとに南方蓮田遺跡、同宝崎遺跡、同閑場遺跡、同番町遺跡等別個の遺跡として呼称されてきたが、これらは、基本的には接続して一大遺跡を形成するものと考えられ、その総称として南方遺跡として全体が一括されるものである。この南方遺跡をはじめとして、旭川両岸冲積平野部及び、周辺丘陵には弥生時代の遺跡が現在まで約25ヶ所確認されている。これらを含めて旭川両岸平野部、及び、周辺丘陵上に展開する遺跡について、弥生時代を中心にその概要を若干触れたい。しかし、これらの遺跡のうちで、発掘調査が実施され遺構、遺物が検出されているのは、津島遺跡、雄町遺跡、高島新屋敷遺跡、赤田遺跡、都月坂2号墓など一部の遺跡である。あと大半は、工事等の二次的発見に基づく確認で、その詳細は明確でないものが多い。

中国山地とそれにつづく吉備高原の山間を北から南に流れる旭川は、その山地南端の竜之口山、ダイミ山南側の旧海岸部に広大な冲積平野を形成している。この旭川両岸冲積平野・狭義の岡山平野には、縄文時代晩期以降現代に至るまで人間生活、生産の場が展開してきた。

旭川両岸の冲積平野部には、好対称的に縄文時代晩期から弥生時代の遺跡が展開するが、縄文時代後期以前の遺跡は極めて稀である。西岸平野部で今日まで確認されている縄文時代後期以前の遺跡は、周辺丘陵を含めて僅か2ヶ所の小遺跡で、東岸では未確認（北部丘陵谷間に小貝塚があったと伝えられるが現状では未確認）である。その一つは、ダイミ山南山麓の津島土生に存在していた縄文時代後期の朝寝鼻貝塚で、過去に磨消縄文土器片をはじめ後期初頭の土器片とハイ貝等の貝殻を出土していたと伝えられるが、現状では全く消滅している。もう一つは、ダイミ山西の都月坂近くの南小支丘陵上で石鏃や剝片の散布が確認されているが、土器片が未発見であるため時期は不明である。

弥生時代前期になると旭川両岸冲積平野部に、以後弥生時代全期間を通じてその地域の中核的遺跡となった遺跡が点在している。旭川東岸では、原尾島の百間川遺跡と雄町遺跡がこれまでに確認されており、両者は、旧旭川（支流を含む）の自然堤防上に遺跡が形成されているもので、いずれも縄文

南方遺跡周辺地形図



時代晚期後半の土器片をも出土している。前者は現百間川河床にあり道路工事、流路掘削によりこれまで縄文時代晚期、及び弥生時代前期から後期の土器片や石庖丁等の遺物の出土が知られている遺跡で^②立地は旭川旧本流河道東岸に位置する。後者は、前者の東北約2kmの地点に形成された遺跡で、近接して旭川旧支流河道の一つが通り、これまでの岡山県教育委員会の発掘調査により^③、縄文時代晚期の土器片及び弥生時代全時期、さらに古墳時代、奈良、平安時代の種々の遺物や、弥生時代の住居址、土塙墓等をはじめとして各時代の各種の遺構が検出されている。一方、旭川西岸平野部では、津島遺跡が弥生時代前期から後期に至る一大中核的遺跡として知られ、昭和43年44年の発掘をはじめとしてこれまでたびたび発掘調査が実施されている。これらの調査の結果、縄文時代晚期後半の土器片、及び弥生時代前期から後期に至る各種土器類や石器類、木器類等の遺物や、高床式倉庫、堅穴式住居址、米貯蔵穴等の遺構が検出されている。^④ 今のところ、弥生時代前期の遺跡として旭川西岸で知られているのは津島遺跡一ヶ所であるが、中期以降さらに拡大的発展を示している。

中期以降になると、旭川両岸平野部に遺跡が拡大増加するが、東岸の遺跡は存在が知られる程度でその詳細は判然としていない。西岸平野部では、南方遺跡（蓮田、宝崎、関場等の遺跡）、上伊福遺跡（絵図、亀山、津倉、児童会館、栄ヶ崎等の各遺跡）と、津島遺跡の東南から南、南西にかけ半放射状に取り囲むように飛躍的に拡大して遺跡が展開する。これらの遺跡の出土物はこれまで山陽地方の中期の指標的なものとして注目されていたが、二次的出土や、戦前の坪掘の発掘であったため遺跡自体の内容は判然としていない。いずれにせよ今日まで知られている弥生時代中期の遺跡の分布状態は、津島遺跡を中心に現存の国道180号線附近まで遺跡が拡大しており、中期遺跡の南限がこのあたりにあったと推定される。ただ、津島遺跡の南々東約3kmの所、現旭川の国道2号線新京橋西詰南側で上木工事により確認された新京橋遺跡は、中期前葉の純包含層が後期の包含層下約5mの所で確認された。採集土器は、壺が頸部から胴部上半に櫛描による十数条の平行沈線文とその下に刺突文がめぐり、壺が口唇部に刻み目があり頸部に数状のへら描平行線が施されたものである。文様、土器整形からみて中期前葉でも古い時期、畿内第Ⅱ様式前半併行のものと考えられる。また出土状態が判然とせず、前記の壺、甕との層位関係は不明であるが平行櫛描文と波状櫛描文を交互に施した壺片が多量に同遺跡で採集されている。前者に比較して文様構成は一型式新しいようであるが、畿内第Ⅱ様式併行のものであると推定される。

いずれにせよ、新京橋遺跡は前記の中期の遺跡とは距離的に全く隔絶しており、比較的短期間のもので、若干その内容、性格を異にするものである。

弥生時代後期になると、遺跡はさらに拡大増大し、東岸平野部では遺跡が赤田遺跡、乙多見遺跡、関遺跡等自然堤防上にブロック的展開を示す一方、南山塊の谷で銅鐸が3個出土しており^⑤さらに丘陵に壺棺、甕棺墓群が形成されている。一方、西岸平野部でも弥生時代後期の遺跡の分布状況は、急速に南下する一方周辺丘陵にも墓地遺跡が形成され著しい増大を示している。後期の平野の遺跡は、新京橋遺跡、天瀬遺跡、大供遺跡と津島遺跡の南約3kmの所にはほぼ東西一線上に遺跡が連なって確認されている。これらの遺跡確認は工事等の二次的要因に基づくものや、戦前の発見であるため遺跡自体の内容は不明な点がほとんどである。これらの遺跡の分布からみて西岸平野部の弥生時代後期遺跡の南限は、現国道2号線南部附近まで拡大していたことがいえる。一方、北部のダイミ山丘陵上の鞍部、都月坂には岡山大学考古学研究室の近藤義郎氏らの発掘調査により古墳出現以前の墳墓として注目されている都月坂2号墓が形成されている。さらに西の矢坂山丘陵山頂部一帯には壺棺、甕棺墓群による大規模な墓地遺跡が形成されており、そのうちの一部の壺棺からは柳葉形銅鏡が出土している。^⑥しかし、弥生時代後期の遺跡の展開から旭川西岸平野部が生産の場として飛躍的に拡大したのは事実であろうが、ダイミ山南から大供一天瀬に至る平野部が全面的に活用されたとは考えがたく、内部に点々と大きな後背湿地を抱えた状態であったであろう。

古墳時代以降の平地遺跡については建設工事等で確認されたものも一部あるが、西岸平野部では市街地に重なり、また遺跡上部が過去の水田整地等で削平されているため判然とせず、東岸平野部でも同じことがいえる。これまでも古墳時代の平地遺跡で前記の雄町遺跡以外調査、確認がおこなわれているものは非常に少ない。

一方、古墳は、周辺丘陵に備前車塚古墳をはじめとして多数存在するが、前半期古墳でも古式の大形前方後円墳は東岸平野南丘陵・操山に系統的に築造されている。しかし、西岸丘陵部では古式の古墳は存在するが大形前方後円墳の展開は認められず東岸の分布状況に著しく劣る。さらに後半期古墳の展開でも、東岸丘陵には約150基の横穴式石室が一般的な展開を示すのにたいし、西岸丘陵では小形横穴式石室を中心にして約30基の横穴式石室墳が展開するだけで、質、量的に極めて劣っている。

旭川西岸の古墳の展開状況は、質、量とも西岸が著しく劣り、弥生時代の遺跡の展開状況の上に立ってみると極めて逆対称的な様相を示し、弥生時代

社会から古墳時代社会への発展における両地域の状況の異なりを示唆するも
ではなかろうか。

(出宮徳尚)

- 註① 鎌木義昌「第1編原始時代」「岡山市史・古代編」33頁、岡山市役所、1962年
- 註② 註①
- 註③ 山陽新幹線工事に伴なう事前調査として岡山県教育委員会が1968年から発掘調査
を実施し、縄文時代晚期の土器片をはじめとし、弥生時代～平安時代に至る遺構
や遺物が多数検出されている。
- 註④ 「岡山県津島遺跡調査概報」、岡山県教育委員会 1970年
- 註⑤ 鎌木義昌「岡山県兼基遺跡」「日本農耕文化の生成」「日本考古学協会編」1961年
- 註⑥ 近藤義郎、春成秀爾「埴輪の起源」「考古学研究」第13巻3号19頁、考古学研究
会1966年
- 註⑦ 水内昌康「備前矢坂山出土の2個の銅鏡」「古代吉備」第2集 12頁 1958年

第二章 調査経過

岡山市南方地区内及びその周辺に存在する遺跡を現在南方遺跡と総称しているが、古くは遺跡、遺物の発見された土地の小字名ごとに蓮田遺跡、宝崎遺跡、関場遺跡、番町遺跡等と個別的に呼称されていた。特に蓮田遺跡は、これらの遺跡の代表的遺跡として、戦前から瀬戸内地方の弥生時代中期の標準的遺跡として全国的に知られており、その出土土器も編年標準型式土器として注目を浴び、昭和13年森本六爾・小林行雄氏によって集成された弥生式土器集成図録にも4例掲載されている。その後、附近から土木工事等により点々と土器等の出土が伝えられていたが、昭和34年に今回の発掘地点のすぐ北東の所に国立病院が建設され、その工事に伴なって多量の土器、木片、石器と炭化米、種子等が出土したと伝えられる。しかし全くの未発掘調査であったため一部の遺物がかろうじて収集された程度でその内容は全く不明のまま消滅した。

山陽新幹線敷設に伴なう埋蔵文化財の事前調査は全て岡山県教委が国鉄と調査契約をして発掘調査を実施することになっていた。この地域を山陽新幹線が通ることで、南方遺跡の事前調査について山陽新幹線工事局と岡山県教育委員会とで接渉が持たれていたが、用地買収問題の未解決や、市街地内であること、さらに岡山以東の路線地事前調査の実施中などが重なってその具体的な方向は未決のままであった。

昭和44年夏、山陽新幹線敷設に伴なう市道付け代えとして、南方遺跡の一画（南方1丁目～2丁目附近）に市道変更地が設定され、道路敷設工事の一端として下水管埋設工事が実施され、一部が掘削された。この掘削溝両壁面に分厚い包含層と大小多数のピットと遺物が露呈した。この状況を同年9月に県教委職員が発見し、岡山市の工事ということで岡山市教委への連絡があった。市教委は、取りあえず工事中止を要請し、調査した結果、この工事は山陽新幹線敷設に伴なう工事で工事主体は山陽新幹線工事局であり、山陽新幹線に伴なう事前調査の対象工事であることが判明した。このためこの市道変更地の事前調査について県教委と山陽新幹線工事局との間で接渉が持たれ、同年10月工事は中止して県教委が調査を実施することとなった。県教委が他の遺跡の事前調査で手一杯であり、この工程が急ぐことから市教委も調査に助勢して調査にあたることになった。しかし、県教委が手一杯であり、実際にすぐ調査に入れないと県教委の事情から、県教委の要請により市教委が

山陽新幹線工事局と独自で調査契約を結び、県教委の指導と援助のもとに事前調査を実施することとなった。このため岡山市教委は、県教委の指導と援助のもとに昭和44年12月1日より昭和45年4月23日まで市道変更予定地の事前調査を実施した。調査対象地域は、市道変更予定地内の幅8m、長さ120mの区域で、山陽新幹線センター線を基準にしてグリッドを設定し、全面発掘を実施した。調査地は、道路、工程の都合により北方より第Ⅰ地点、第Ⅱ地点、第Ⅲ地点の三地点に区分して発掘調査を実施した。第Ⅰ地点は、下水管工事により2/3がすでに破壊していた。

発掘調査組織

調査主体者、岡山市教育委員会

調査責任者、難波輝夫（岡山市教育委員会教育長）

調査員 高橋護（岡山県教育委員会社会教育課文化財保護主事）
中力昭（岡山県教育委員会社会教育課）

葛原克人（同上）

枝川 陽（同上）

正岡睦夫（同上）

泉本知秀（同上）

伊藤 晃（同上）

柳瀬昭彦（同上）

新東晃一（同上）

松本和男（同上）

松本 猛（岡山市教育委員会社会教育課長）

浅原 健（前岡山市教育委員会社会教育課文化係長）

植田心壯（岡山市教育委員会社会教育課文化係長）

出宮徳尚（岡山市教育委員会社会教育課）

井上甫之（岡山市教育委員会社会教育課指導主事）

近成久美子（岡山市教育委員会社会教育課）

調査補助員 宮本公仁生

氏平富美子（庶務担当）

江本倭文子（同上）

田淵妙子（同上）

調査中の入骨出土にあたりその処置について樋口清治氏（東京国立文化財研究所保存科学部）の現地出張を得、多大の御指導と御助力をいただき、また寺門之隆氏（大阪市立大学）の現地来訪を得、入骨鑑識と御助言をいただいた。

また、発掘調査にあたり、地元町内会長西原礼之助氏（岡山市文化財専門委員長）の多大な御支援と御助力いただきましたことを深く感謝いたします。

遺物整理、本調査概報作成にあたっては、岡山大学学生、中村義市、堤論吉、安川豊史、山本雅靖、佐藤敬二郎、清心女子大学学生蓬郷孝子、井上りえの、諸君の真摯な御助力、御協力を賜わり厚くお礼申します。

1. 経過

発掘調査は、山陽新幹線敷設に伴う市道変更予定地内を路肩幅員を残して長さ 120m、幅 8m にわたって全面発掘を実施したもので、発掘地域はグリッドを設定した。グリッドの設定は、山陽新幹線センター基準線を基準にして区画したもので、方向はこのセンター基準線の南方 1 丁目、2 丁目通過部分の方向に一致する。このグリッドの北（N）方向は、磁北に対し 27 度 40 分 東に振っている。発掘地は、道路状況等により、第Ⅰ地点から第Ⅲ地点まで 3 地点に分け、それぞれにグリッド原点を設定した。第Ⅰ地点の原点は、山陽新幹線起点から 160km 125m 64cm の地点。第Ⅱ地点の原点は、同 160km 177m 64cm の地点。第Ⅲ地点の原点は、同 160km 215m 64cm で、それぞれ E 方向は直交東に振っている。以下第Ⅰ地点 G r N, G r W, G r S, G r E

は、第Ⅰ地点のグリッド方向北、西、南、東を表わし、記号次の数字（第Ⅰ地点 G r N 6 E 13.5）は距離（単位 m）を表わす。（第Ⅰ地点原点北 6m、東 13.5m 地点）。



第 2 図. 2 号人骨保存処置作業状況

従って第Ⅰ地点
Gr S 20ラインと、
第Ⅱ地点 Gr N 32
ラインとは一致す
ることになる。

なお、使用レベ
ル数値は、絶対高
である。



第3図、雨天下の作業

発掘経過

昭和44年12月1日、発掘開始。

12月2日 第Ⅰ地点グリッド設定。

12月5日 第Ⅰ地点で弥生時代前期の包含層の存在を確認。

12月12日 第Ⅰ地点発掘区でピット等の遺構が検出されはじめる。

12月16日 第Ⅲ地点グリッド設定。

12月20日 第Ⅰ地点で土塙墓等遺構の群が検出されます。

第Ⅲ地点でピット等の遺構発見されます。

12月25日 第Ⅰ、第Ⅲ地点とも遺構が多く検出されます。

昭和45年1月6日 第Ⅰ地点、第Ⅲ地点の各ピット、遺構掘り下げ。

1月12日 第Ⅲ地点でも土塙墓検出される。

1月16日 第Ⅱ地点グリッド設定。

1月19日 第Ⅰ地点で弥生時代中期の多数の土塙墓群が検出されます。

第Ⅱ地点で一部古墳時代の溝等検出される。

1月28日 第Ⅰ地点土塙墓群より点々と人骨片が出土します。斂棺の
発掘、内部に小児骨片残存。

2月5日 第Ⅰ地点、土塙群をさらに掘り下げ、下の土塙墓群が検出され
る。

第Ⅱ地点で組合う柱穴が確認される。

- 2月12日 第Ⅰ地点で土塙墓下に第Ⅱ様式上器を伴なう灰穴が検出される。
- 2月17日 第Ⅱ地点で住居址の一部残存状態を検出。
第Ⅰ地点西壁上塙墓から細形銅劍鋒先出土。
- 2月23日 第Ⅰ地点土塙墓からほぼ完全に揃った人骨出土。
- 3月5日 第Ⅲ地点で舟形土塙の検出。
- 3月12日 第Ⅰ地点土塙墓下に灰穴出土。
- 3月23日 第Ⅰ地点で屈葬人骨検出。
- 3月27日 第Ⅰ地点で伸展葬でほぼ完全な人骨検出。
- 4月5日 人骨3体取り上げ完了。
第Ⅱ地点実測。
- 4月10日 第Ⅰ地点調査終了。
- 4月12日 第Ⅱ地点調査終了。
- 4月13日 第Ⅲ地点遺構追求。
- 4月21日 第Ⅲ地点遺構実測。
- 4月23日 第Ⅲ地点調査終了。

ここに、延べ120日に及ぶ発掘調査を終了した。

発掘調査の結果、弥生時代前期中葉の土器片が検出され、南方遺跡の上限は弥生時代前期中頃まで上ることが判明した。下限は、後期の遺物。遺構はほとんど検出されなかつたが、中期以上の包含層が後世に削平されているためそれ以降の遺跡の状況は不明である。しかし、土師器や須恵器を伴うビットが点在していることから一時的な断続はあったが、古墳時代まで継続したと推定される。

(出宮徳尚)

第三章 遺構

発掘調査地域の遺構は、旭川の冲積作用によってできた微高地上に形成されているが、この微高地の北側（第Ⅰ地点G r 27付近）は後世の旭川の一支流によって削り取られており、南端は第Ⅲ地点G r S 5から南約20m付近から自然的に緩やかに下る。包含層もこの付近まで薄く延びていて、一応この地点での南限である。このたびの発掘は、遺跡全体からみれば、微高地上に形成された遺跡の一部をトレンチ的に縦断したもので、遺跡の一部を明らかにしたにすぎない。したがって全体からみれば、極めて部分的であるが、以下判明した遺跡の概要を地点別に記したい。

1. 第Ⅰ地点（第5図～第16図）

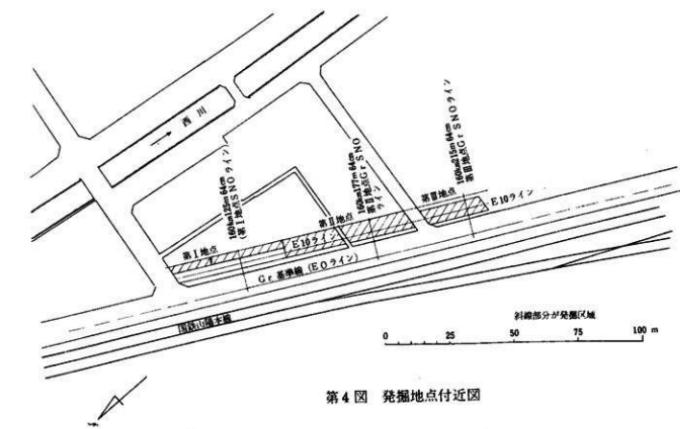
下水管工事により掘削された部分で、第Ⅰ地点G r N26からG r S19までの区域であるが、発掘調査が実施できたのは、G r E12からG r E14の巾2m程であった。この地点の基本的層序は、次のとおりである。

- ①. 現地表層
- ②. A=瓦礫堆積層（空襲後整地層）
- ③. B=水田耕土層（明治時代頃？）
- ④. C=酸化粘土層（鉄床層）
- ⑤. D=酸化粘土、黒褐色有機質土混層（須恵器等の遺物包含層）
- ⑥. E₁=茶褐色有機質粘土微砂土層（弥生時代中期後葉の土器片を包含するが遺構はあまり検出されない。以下弥生時代の土器片を含む包含層）
- ⑦. E₂=黒茶褐色有機質微砂土層（弥生時代中期の包含層、一部遺構が検出される）
- ⑧. E₃=黒褐色有機質微砂土層（土塙墓群が検出される。）
- ⑨. E₄=黒灰褐色有機質微砂、粘土層（この層を切り込んだ土塙墓はない。）
- ⑩. E₅=茶褐色有機質細砂微砂土層（前期の土器片を比較的多く出土しこの層から前期の土塙墓が掘り込まれている。）
- ⑪. F=黄褐色砂質堆積上層（基盤自然堆積層）

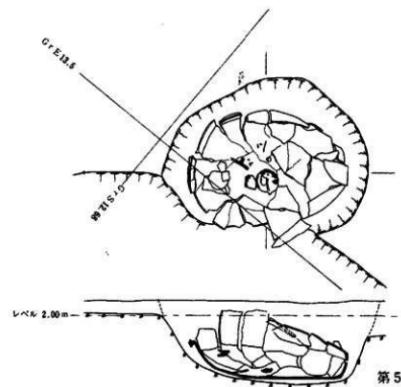
包含層E₂層より土塙墓等の遺構が検出されるが、E₄、E₅層が存在するのは第Ⅰ地点G r S10からG r S20附近で、G r S5から北ではあまり確認されない。全体的にみてE₄層～E₂層が、弥生時代中期前葉（畿内第Ⅱ様式併行）と考えられ、E₅層は前期後半に比定される。

土塙墓、第Ⅰ地点では、全体を通じて群集をなす土塙墓群が検出された。検出された土塙墓の概数は、第Ⅱ地点北端のものを含む前期～中期のものが約250基である。これらの内の大半のものは第Ⅱ様式以降のものであるが、第Ⅰ様式新のものも少數あった。前期の土塙墓は、不定形な橢円形輪郭で底部も凹凸が残る不整形なもので、全体が検出されたものがないのでその規模は不明である。土塙墓には、埋葬直後に土器を供献した状態のものがあり、これには薄い炭化物の散布が認められ埋葬時に墓上部で焚火がおこなわれたことを示している。また、土塙底部に鹿の肩胛骨を入れたものが二例検出されたが、肩胛骨には焼跡等の二次的変化は認められなかった。またこの土塙の近くには深さ50cm程の橢円形ピットがあり多量の骨粉の詰ったものが検出された。

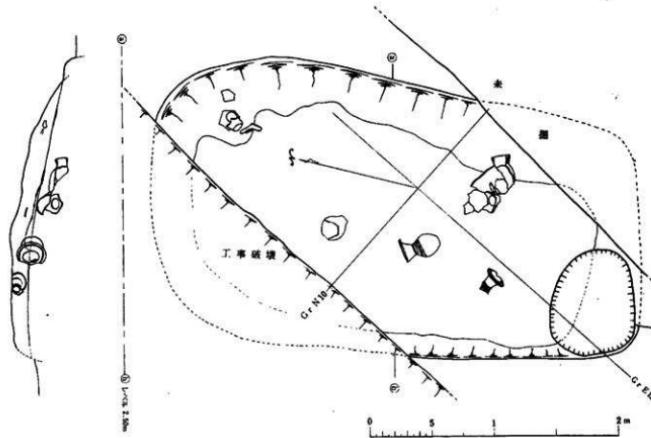
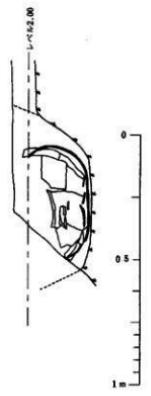
中期の土塙墓は、輪郭、底部とも一応整った掘り方を示すが、その形はまちまちで方向も不統一で多くは切り合って群集をなし、同じ地点に中期全体を通じて土塙墓が重複している。しかし、土塙群が全面に広がるのではなくいくつかの群をなして墓域を形成しており、第Ⅰ地点ではGrN6～12の一組と、同S5～21附近の一組、さらに西壁部分との三群の土塙墓群が集合して一つの墓域を形成していたと推定される。しかし、各墓群間で明確な境界的なものはなにも検出されず、ただ間隔を空けているだけであったようである。GrS12～15附近で埋葬人骨が3体検出され、発見順に1号～3号人骨と呼称した。1号人骨はE2層からの掘り込みで、ほぼ完全に入骨が残存していたが、細部の識別ができる程の状態ではなかった。人骨は上向伸展葬で、鑑識の結果、40才代の男性であることが判明した。^①格別の副葬品や、枕石等の埋葬施設は検出されなかった。中期中葉と推定される2号人骨は、層位の位置づけはできない状態であり、肩から上を下水管工事で切断されていたが、横向屈葬である。保存状態は比較的良好く足の指等の細部も一応識別できたが、性別、年令は不明である。副葬品や土塙以外の埋葬施設は検出されなかつたが、人骨に接して中期前葉の櫛描文のある土器片が出土し、この人骨のおよその時期が推定できた。第3号人骨は、最も保存状態が良く軟骨を除いてほとんどの骨格が残り、上向伸展葬で鑑識の結果^②20才前後の女性であることが判明した。この人骨の上塙は、地盤を二段に掘り込んだもので下段の掘り込みは遺体ぎりぎりの大きさであり、副葬品や墓塙以外の埋葬施設は検出されなかつた。ただ、人骨の頭から大腿骨上半にかけて薄い炭化物の一面的分布が認められ、埋葬直後の埋土を被う前に遺体上で稻を含むもので焚火をおこなっていたことが確認された。この人骨の時期は、共伴遺物が



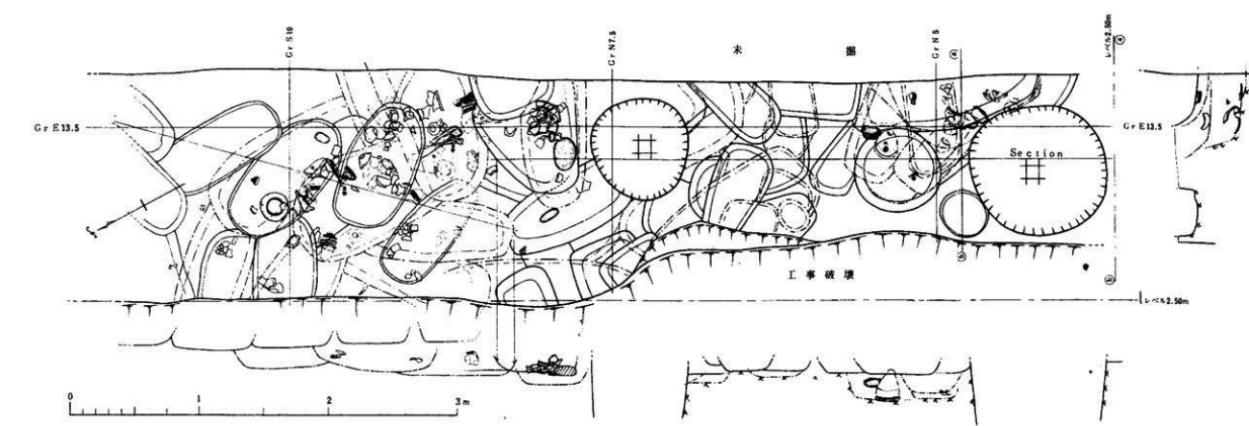
第4図 発掘地点付近図



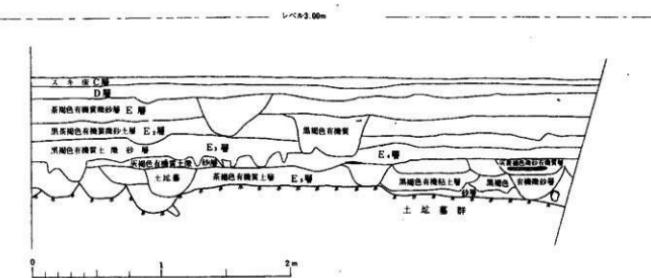
第5図 第1地点S12要検査実測図



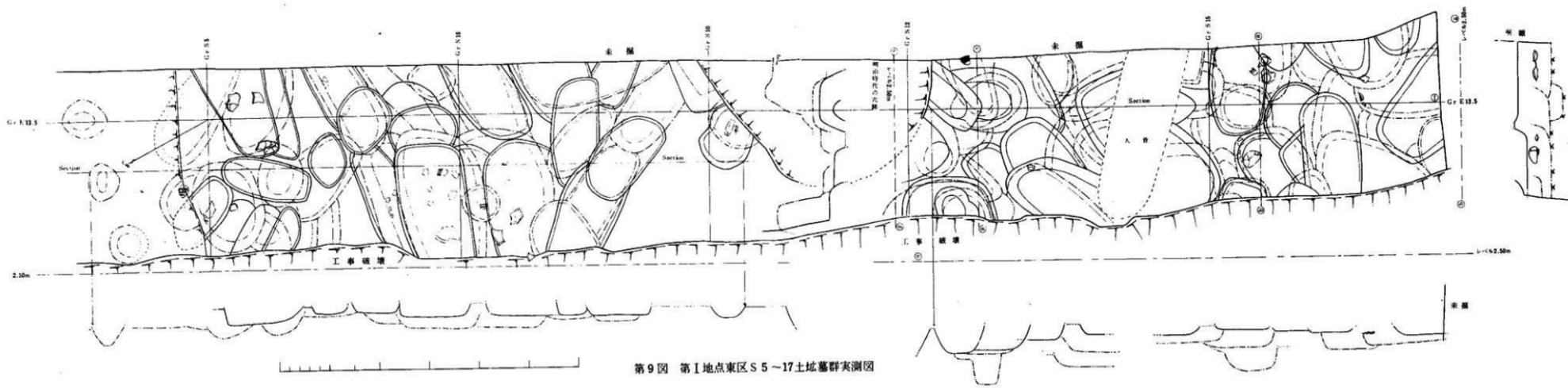
第6図 第1地点N10穴六邊構実測図



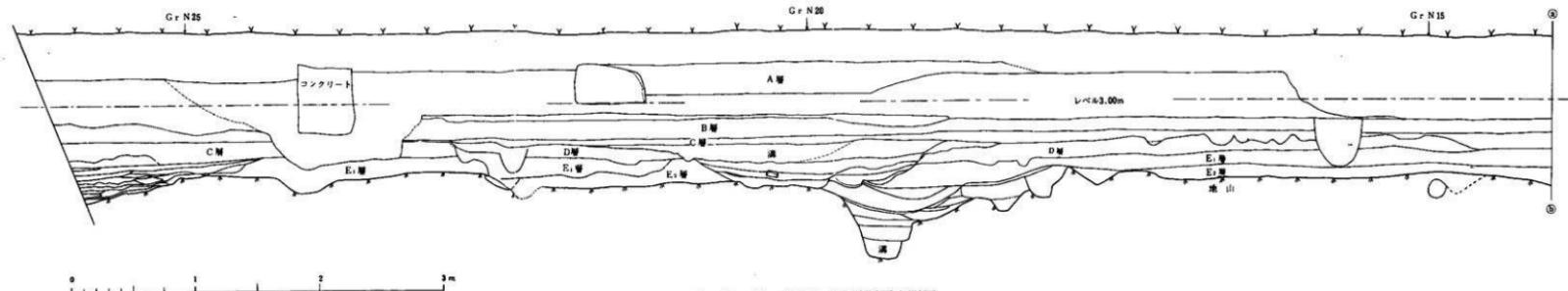
第7図 第1地点N4～11土塙墓群実測図



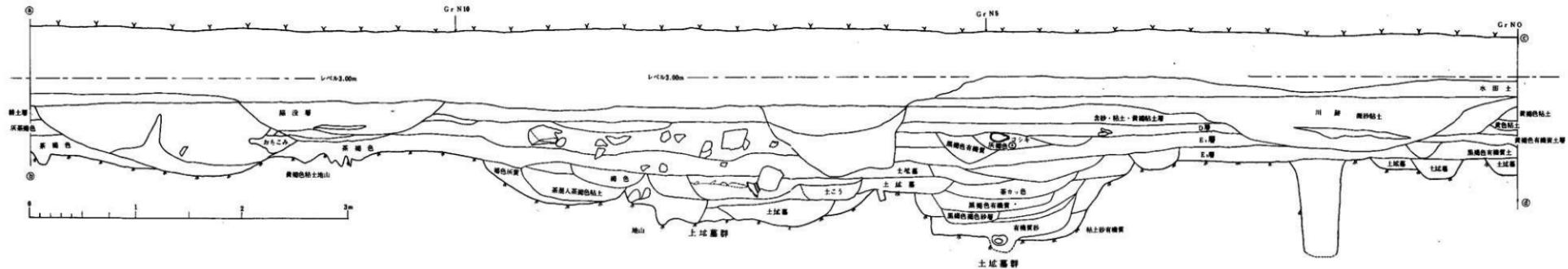
第8図 第1地点南壁面実測図



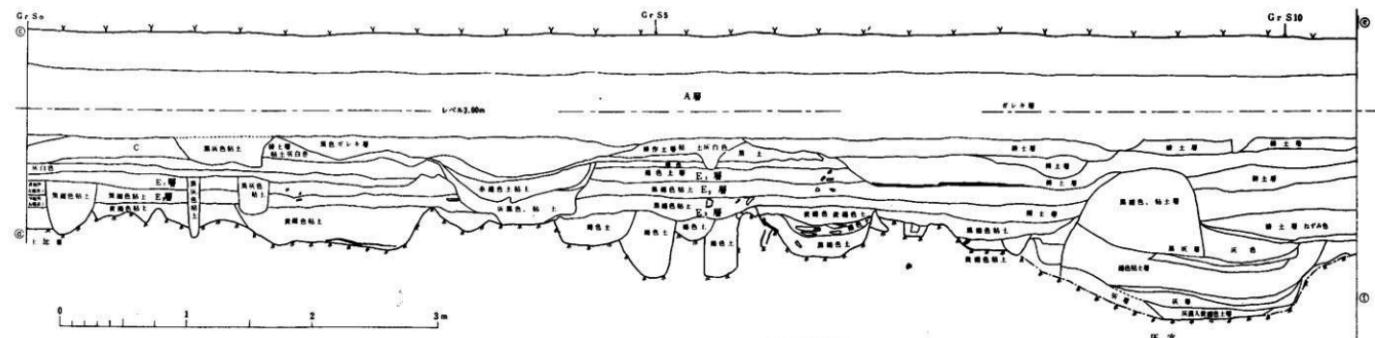
第9図 第I地点東区S5~17土塙墓群実測図



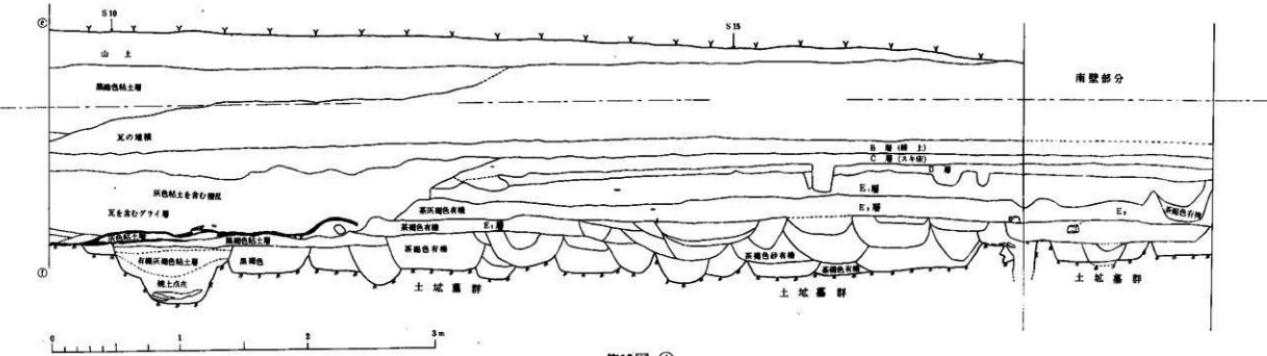
第10図の① 第I地点東壁断面実測図



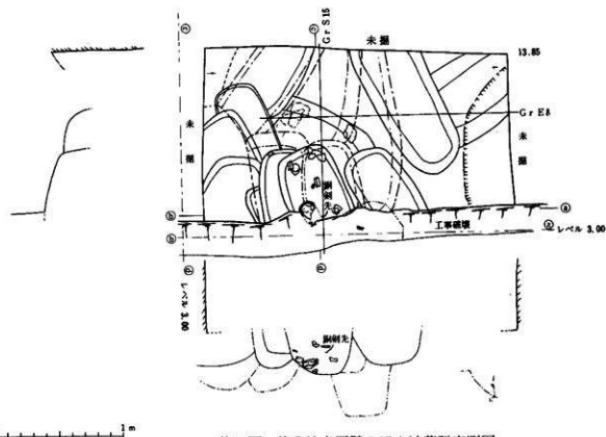
第10図の②



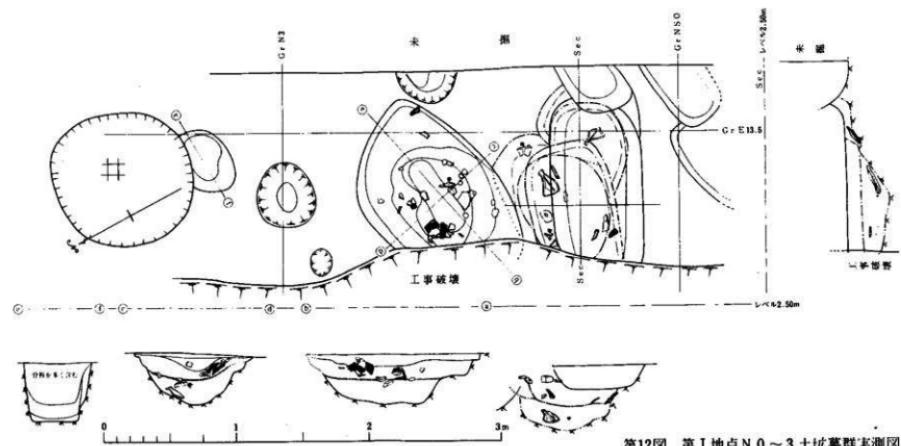
第10図の③



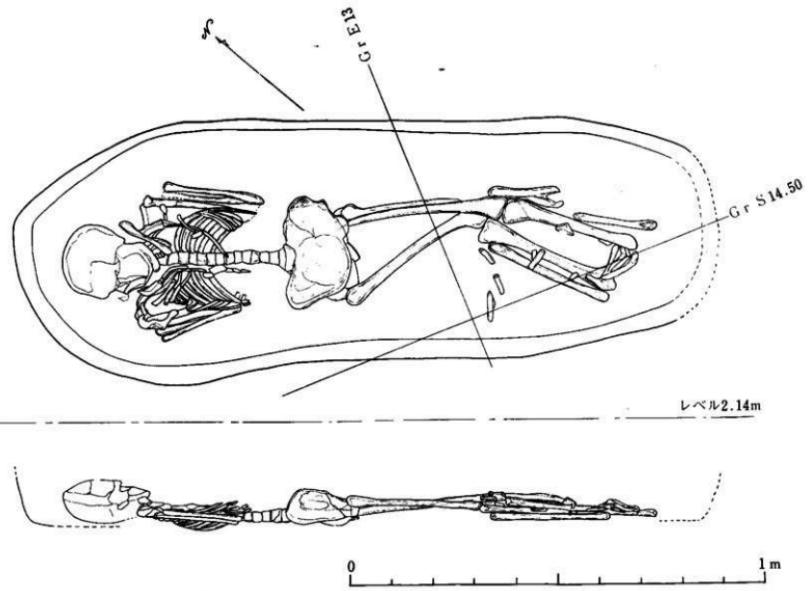
第10回 ④



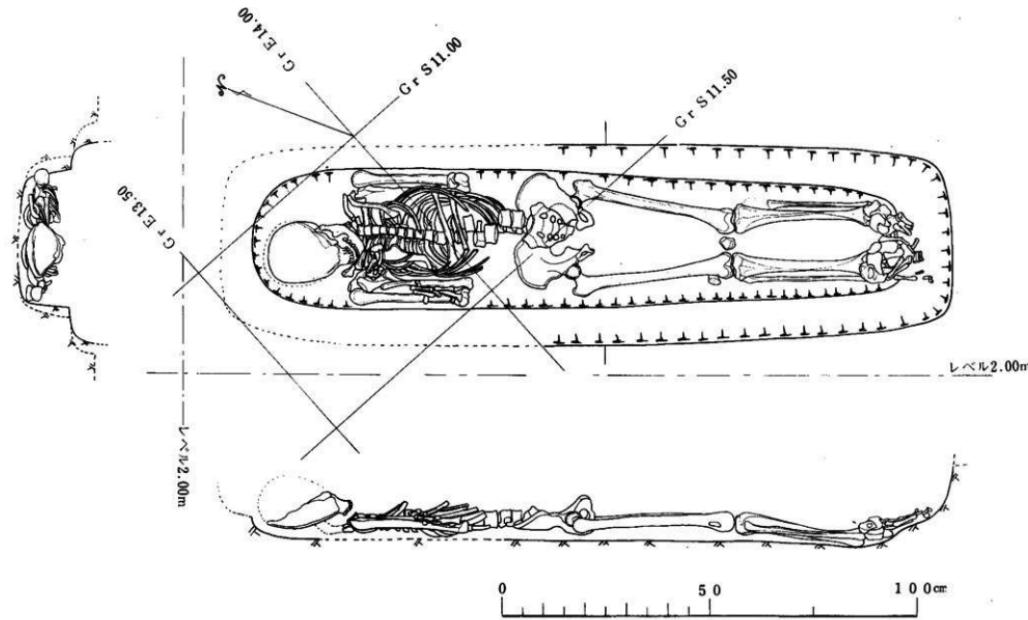
第11図 第1地点西壁 S 15土塙墓群実測図



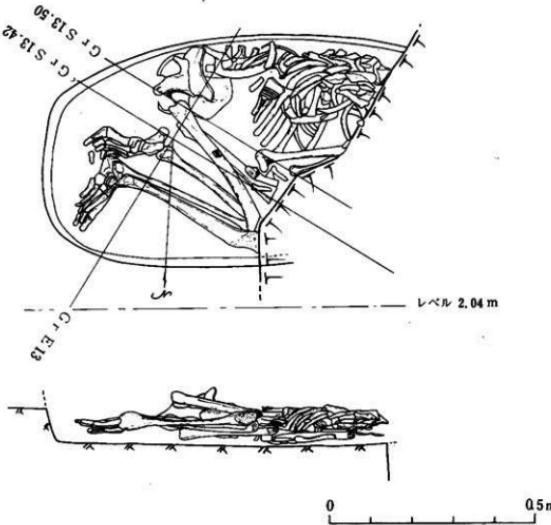
第12図 第I地点N 0~3 土塙墓群実測図



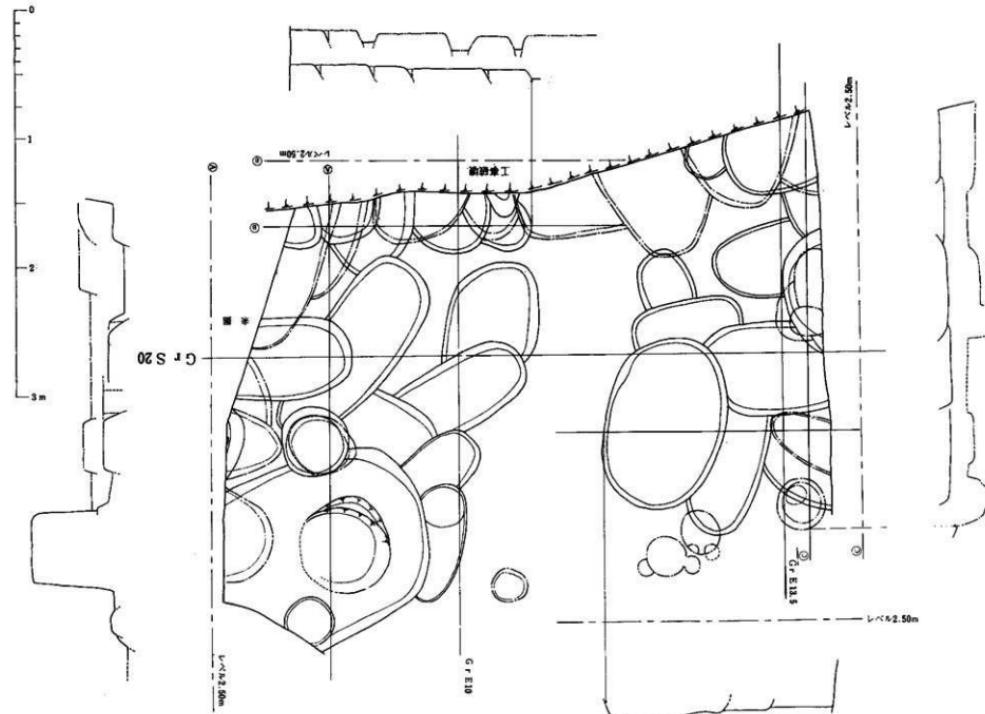
第13図 第Ⅰ地点第1号人骨実測図



第14図 第Ⅰ地点第3号人骨実測図



第15図 第I地点第2号人骨実測図



第16図 第I地点N20土塚墓群実測図

ないので判然としないが、層位的にはE₅層に対比され、附近の基盤を掘り込んだピット、土塙は前期後葉のものがほとんどであることからみて前期末から中期初と推定される。

第Ⅰ地点で検出された250基の土塙墓は、全て地面を掘り込んだだけの上塙に遺体を直接埋葬したもので木棺等の埋葬具がほとんど使用されていないことが判明した。ただ一例G r S' 12附近で前山Ⅰ型式の櫛棺が検出され、内部には小児骨の一部が残存していた。また、G r N 8~12の土塙墓群の上部には多量の土器の副葬が認められ、畿内第Ⅳ様式併行の土塙墓からは管玉を2、3個副葬しているものもあった。土器の多量副葬が認められるのは第Ⅲ様式(南方型式)からであるが、この墓群では第Ⅱ様式後半から比較的多くの土器の副葬が認められる。

西岸G r S 14附近の西壁を清掃中、土塙墓の断面から細形銅劍鋒先が頭蓋骨附近から検出され、この附近にもこの土塙墓をはじめとして多くの土塙墓が切り合い、重なり合って一つの土塙墓群を形成している。銅劍鋒先を出土した土塙墓の残存部分からは残余の銅劍破片は検出されなかったが、土塙墓の大半が工事で破壊されていたため細形銅劍の詳細な出土状況は判然としない。また鋒先が頭蓋骨側に存在していたことから多分に副葬品とされていた可能性が大きいが、その折れ口がかなり古いために、同時代の他の墓塙による切り合いによって攪乱破損を受けていた可能性もある。銅劍出土土塙墓と同一レベルの土塙墓群も他には明確な副葬品はなく点々と土器片が混入している程度で、副葬品からの確実な時期を比定することはできないが、土塙墓はE₅層から切り込んでいることからみて中期中頃畿内第Ⅲ様式併行(南方型式)の時期と推定される。いずれにせよ、これらの土塙墓群で供獻用土器以外の副葬品が確実に認められるのは、畿内第Ⅲ様式(前山Ⅰ型式)併行の時期からである。

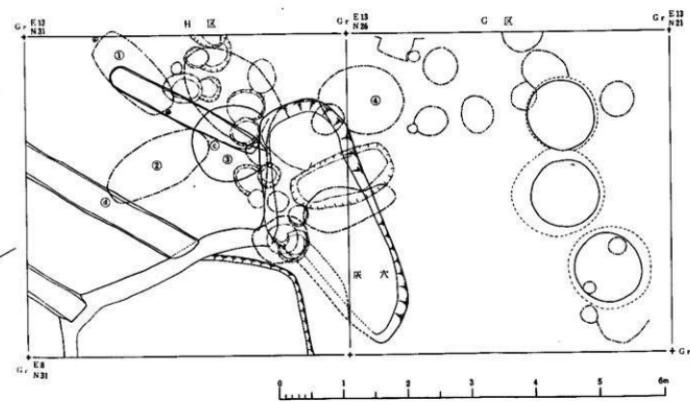
この他第Ⅰ地点で点々と比較的大きな不整形の隅丸長方形で底部がU字状を呈し、内部に完形に近い壺や、獸骨、さらに多量の灰が互層になって埋った遺構が検出され、一応、灰穴と呼称した。G r N 10附近の土塙墓下から幅2m、長さ4m程の床面の不整形な穴で、内部には厚い焼上、灰層が平行状態に堆積し底部近くに完形品に近い第Ⅱ様式土器が設置後投棄された状態で検出された。埋積灰、焼土上には点々と鹿の頭蓋骨をはじめとして多くの獸骨が認められるが、底部基盤土は、全然焼けておらず、多量の灰、焼土の堆積は少なくとも直接この穴の直上で形成されたものがそのまま堆積したものではなくこの穴にそれらが一括投棄された状態を示す。この状態は他地点の灰穴

でも共通して認められ、多量の灰の互層的堆積が認められるのにかかわらず、壁や穴底部には焼けた痕跡はまったくない。

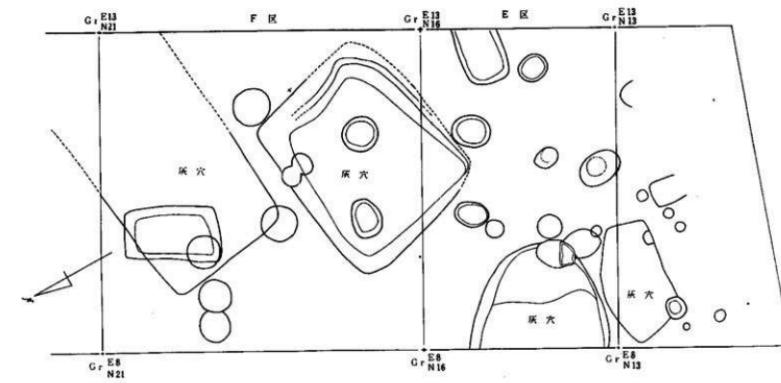
2. 第2地点（第17図～第23図）

土塙墓群が検出されるのは G r N 30附近（第I地点 G r S 22）まで第I地点の土塙墓が続くが、それより南では土塙墓群は検出されなかった。この北部のE₂層中で検出された土塙墓群の南端は、巾1m程の浅い溝でそれ以南と区切られていることが確認されたが、E₃層以下ではこのような意識的な区画は設けられていない。弥生時代中期中葉末～後葉初頭には墓地区域を除いて全体に、柱穴、灰穴、ピットが不規則に形成されている。G r S' 0～10附近では、組合う柱穴や、炉跡状の焼土塊が点々と検出され、住居址の存在を推定させたが、弥生時代における切り合い・削平・整地が著しく、床面、壁等明確な遺構はほとんど残存していなかった。また、他の地点でも柱穴の存在から当然住居址の存在は推定されるが、一個体を構成するだけの遺構はそれぞれ残存していなかった。これから住居址の時期は判然としないが、弥生時代中期から古墳時代に至るもののが累積的に混存している状態であった。

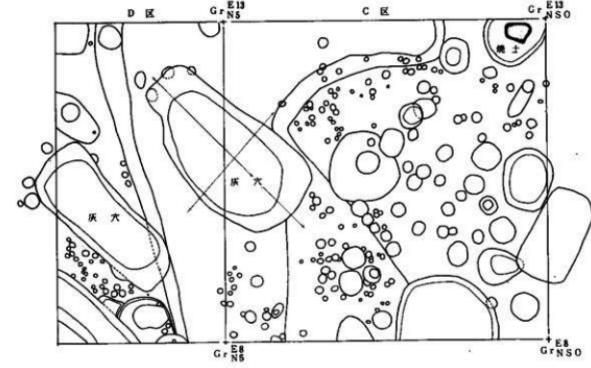
第2地点全体から大小さまざまの灰穴が多数発見された。灰穴の内部の状況は、前記の第I地点の灰穴と同様で、多量の灰が互層的に水平に堆積し、その底面上に土器片や獸骨が点々と散布し、特に第2地点では前期後葉（畿内第I様式新併行）の土器片を共伴する灰穴が点々と検出された。G r N 9附近のものは、長さ2.5m、幅1m、深さ70cmの長方形で、これとほぼ同じ規模の長椭円形のものが近接して検出されている。全体的にみて灰穴は、中期前葉（畿内第II様式併行）になると、前期のものよりさらに拡大し、2m×3m、深さ70cm程の大規模なものとなるが、内部状況はだいたい同様である。しかし、中期中葉のものからは縮小し、前期のものより一まわり小さなものとなり、さらに中期後葉のものは1m前後に縮小する一方、数的には点々と全面的に増加して形成されている。全体的に灰穴は、前期後葉のものが、数も少なく、比較的大きく、中期前葉には量的にも増加する一方さらに大規模になり、以後、中期後葉に至るまで縮小しながら数量的には増大する傾向を示す。いずれにせよ、この発掘では灰穴遺構が機能的に何の遺構であるかを明確にしえなかつたが、その状況、出土物等からみて多分に祭祀に関係した特殊な遺構であると考えられる。



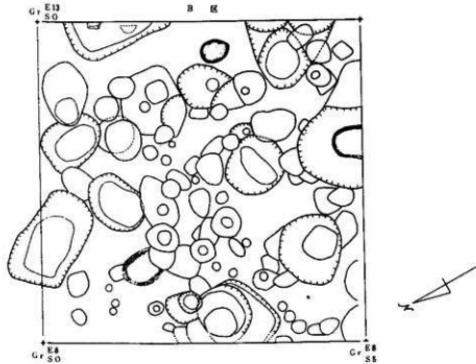
第17図の①



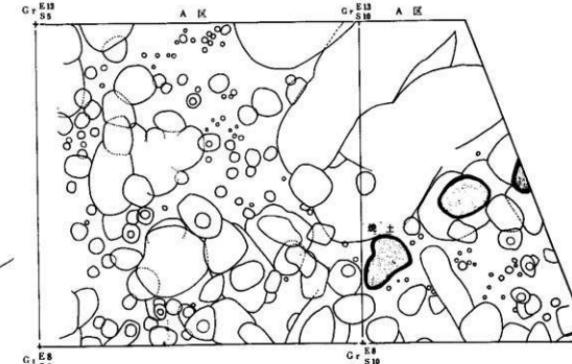
第17図の②



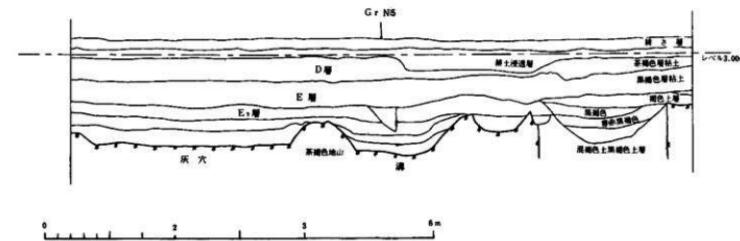
第17図の③



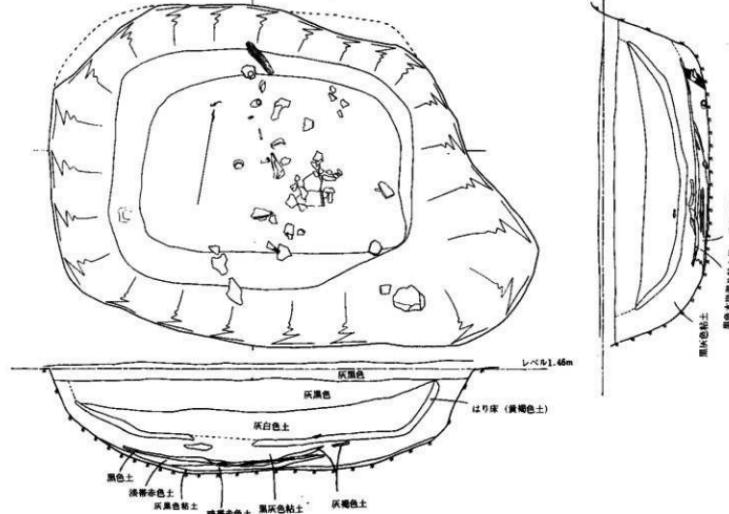
第17図の④



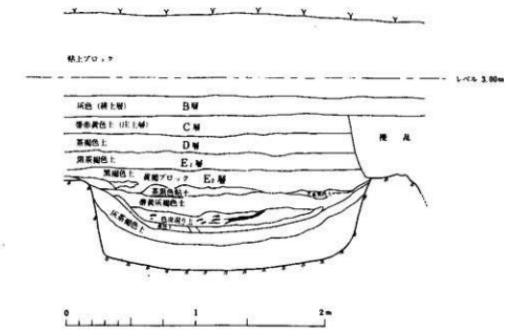
第17図の⑤



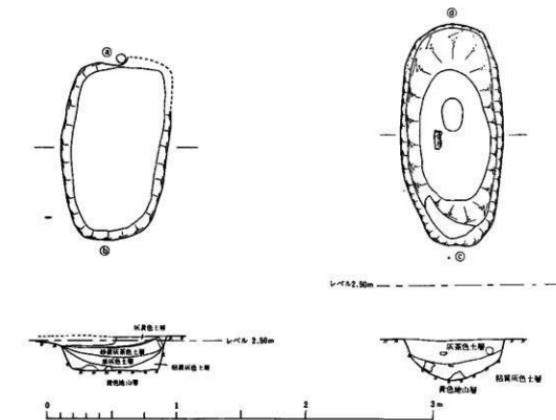
第18図 第II地点 C D区西壁実測図



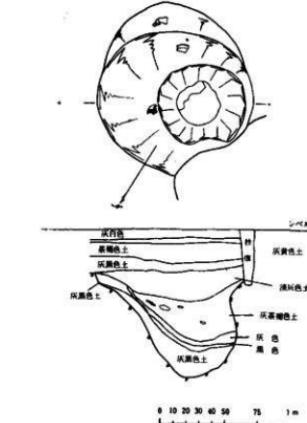
第19図 第II地点F区灰穴遺構実測図



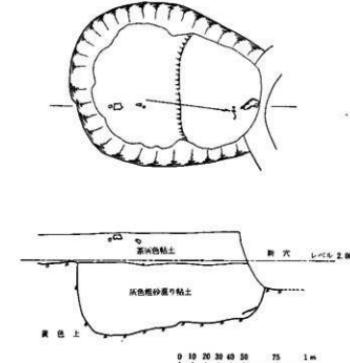
第21図 第II地点E区灰穴遺構断面図



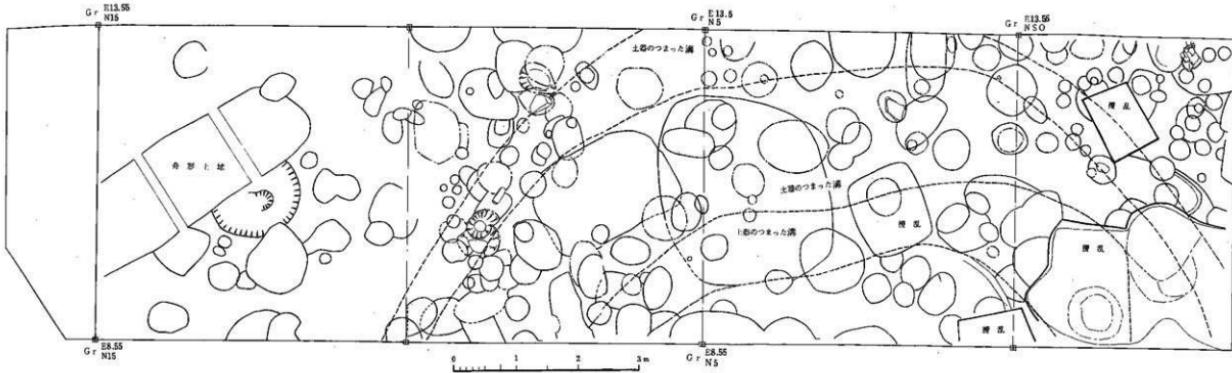
第20図 第II地点H区灰穴遺構①②実測図



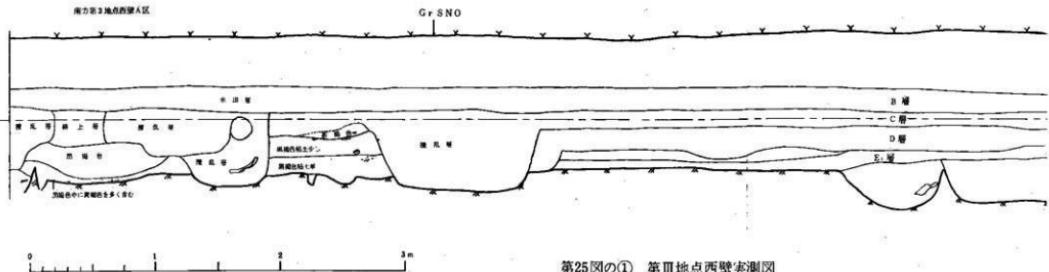
第22図 第II地点H区灰穴遺構③実測図



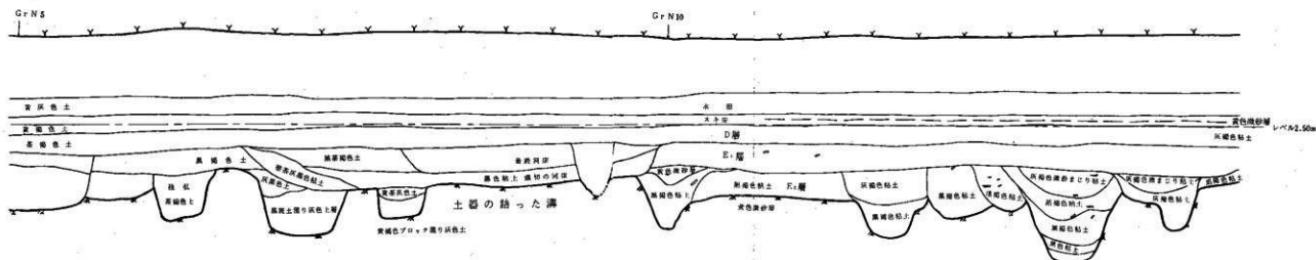
第23図 第II地点G区灰穴遺構④実測図



第24図 第II地点全体プラン実測図



第25図の① 第Ⅲ地点西壁実測図



第25図の② 第Ⅲ地点西壁実測図

3、第3地点（第24・25図）

全体的に多数の小ピット、柱穴が累積的に密集して存在し、南端には少しの土塙墓が存在した。また一部住居址状の遺構配置も検出されたが、この地点も切り合い削平が著しいため住居址の各一部を検出したにすぎず、一個体が構成できる状態では住居址は検出されなかった。ただ、この地点では柱穴底部に比較的扁平な自然石を埋置したものが多く検出され、住居址の柱穴根石と考えられたが、大半がその底部だけが残存している状態で、時期や組合せは判然としがたい。

第Ⅲ地点北部で、前山Ⅰ～前山Ⅱ式（畿内第Ⅲ様式から第Ⅳ様式）の土器片が多量に詰った大形の舟形土塙が一例検出された。土器はほとんどが細片であり二次的土器溜状堆積の状況を呈するが、何の遺構であるか判断しかねるものである。また、第Ⅲ地点中央に、土器片が二次的に溜った浅いU字状の溝が西壁から西壁へ蛇行して流れている。この溝は最初幅3m程のものであったのが埋ったために、幅が狭まり、一度改修され幅2～1mの溝として存在したことが推定される。この溝は、多量の土器片で埋っているが、土器は大半が前山Ⅰ～前山Ⅱ式（畿内第Ⅲ様式～第Ⅳ様式）のものであり、中期の水路と考えられるが、溝自体は基盤土をU字形に掘削しただけのもので、畦畔等の水路施設は確認されなかった。ただこの土器溜の内より2例の分銅形土製品の破片が出土したが、二次的堆積である。

この溝底部に溝より古い柱穴列が現磁北方向にほぼ合って二列検出された。第Ⅲ地点の多数の柱穴中、この二列の柱穴列だけは、方向間隔がしっかりとしており、何らかの遺構に伴うものであると考えられたが、この発掘地内だけの並びでは、何の柱穴列か断定しがたい。全体的に第Ⅲ地点は包含層が薄く、E₁、E₂層しか存在せず、中期でも前葉の遺構や遺物、さらに前期のそれらは基盤土にその底部分が一部残っているものが数例発見された程度である。また、第Ⅰ、第Ⅱ地点で検出されたような大形の灰穴はこの地点からは検出されず、第Ⅲ地点の遺構の主体は、溝と柱穴群であるが、その時期は第Ⅰ・第Ⅱ地点より若干新しく、中期中葉から後葉初めである。

発掘区全体の遺構状況をみると、第Ⅰ地点を中心とした北部に墓地が形成され、第Ⅱ地点以南に柱穴群、灰穴が集中して存在し、北部の墓域と南側の住居区もしくは日常生活の場が意識的に分離された状態にあったことが判明した。しかし、墓域は生活、生産の場に接続して形成されているもので、日常生活の場から隔別的には分離していない状態である。

また発掘結果からみて、この微高地上は長期にわたって安定していて、弥生時代前期後葉から中期後葉まで遺構が重複して形成されている。弥生時代後期及び古墳時代の遺構はほとんど検出しえなかつたが、一部柱穴、ピット、溝などの底部が比較的高い層位で検出され、弥生時代後期以降も生活の場として遺跡が形成されていたと推定される。この時期の生活層はもっと高い層位であり、後に条里制の整地や、水田の地下げで削平されたと推定される。

(出宮徳尚、伊藤晃)

註① 大阪市立大学医学部の寺門之隆助教授のご教示による。

註② 新潟大学医学部小片保教授、および長崎大学医学部内藤芳篤助教授のご教示による。

このたびの発掘調査で多量の土器、石器、さらに管玉等の遺物の出土をみたが、その主要なものを記すと次のとおりである。

1. 弥生式土器（第26～31図）

出土した土器の大部分は中期のものであり、一部前期のものも含まれるが後期のものはほとんど確認されていない。また、少數であるが土師器、須恵器も検出されている。

(1) 前 期

出土した土器片は比較的多いが、完形に復原されるものはない。大部分が壺形土器で、壺形土器は数例である。施文からみてこれらの土器は、前期中葉と後葉に大別されるが、確実な前葉のものは発見されていない。中葉の壺形土器は頸部に一本のへら描沈線が施されているものや、肩部から胴上部に3条～4条のへら描平行沈線や、格子目文が施され、格子目内に木葉文軸状の細線によるX印が刻まれているものがある。壺形土器は、口唇部に刻み目をもつたものとそうでないものがあり、口縁直下に5条～8条のへら描平行沈線が施されている。後葉の壺形土器片は頸部に10条のへら描平行沈線をもつものである。壺形土器は口縁部が逆L字形のものとゆるく外反するものとがあり、それぞれ刻み目のあるものとないものがあり、口縁直下に10条～15条のへら描平行沈線が施され櫛描文直前のものもあり、沈線下に刺突文が付けられているものとそうでないものとがある。また、一片ではあったが円形浮文をもつものも出土している。

(2) 中 期

出土した土器片のほとんどは、(半箱約220箱) 中期のもので、型式はいくつかに分類されるが、中期後葉のものは少なかった。

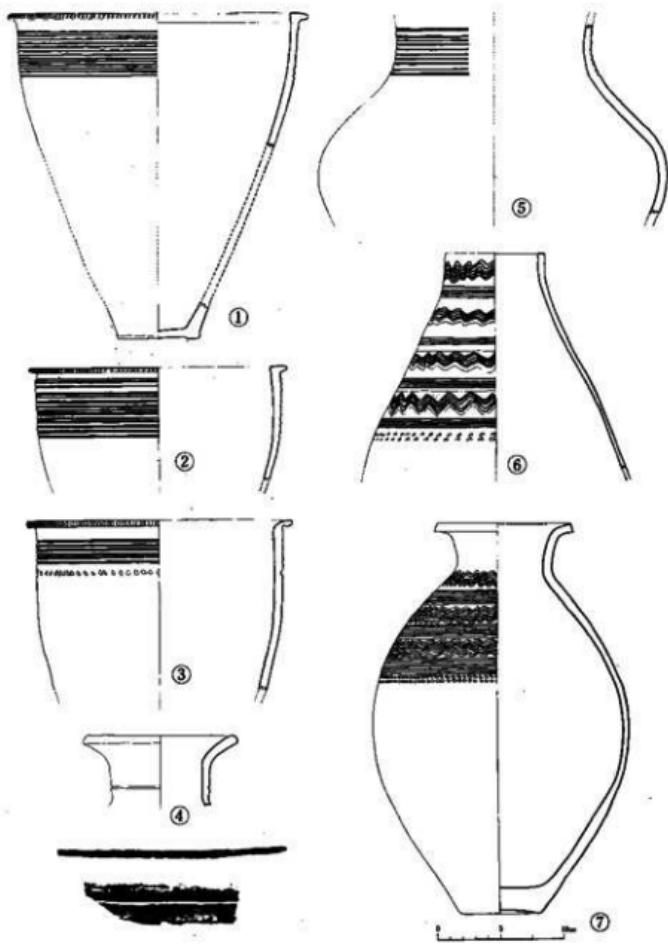
中期前葉の岡山地方の標準型式である高田式の土器形式の土器片の出土は、少數であり、多量に出上するのは、壺形土器に櫛に平行沈線と波状文を交互に施した文様型式のものである。この文様型式第26図⑥、⑦、第27図①～⑤第28図①②、第30図⑯はこれまで断片的に出土が知られているが、岡山地方では高田式①の次の未確認の型式であり、高田式に統く型式と考えられるので、この櫛描文の型式を「南方Ⅱ式」②と仮称し、これまで一般的に知られている畿内第Ⅲ様式併行の南方式土器を「南方Ⅲ式」と仮称したい。この

南方Ⅱ式の壺形土器は、①卵形の胴部に小さな漏斗状の頸部から口縁部をもつものと、②球形の胴部に朝顔形に大きく開いた頸部から口縁部をもつもの、さらに③卵形で無頸のもの、④大形の卵形でほとんど無頸に近く短かな口縁部が少し外反したものに大別される。施文構成は、ほぼ共通で頸部から胴上部に櫛描波状文と平行沈線を交互に施こし、その下端に2~3個の刺突文をめぐらす。②と③は文様上端の頸部に指頭圧痕貼付突帯、刻み目貼付突帯を施している。土器外面整形は、いずれも文様帶より上部が刷毛整形で、それより下はへら削り整形である。壺形土器は、口唇部に刻目がなく口縁部はゆるく「く」字状に外反し、口縁直下には文様が全然施されておらず、胴中央部に1~3個の刺突文がめぐる。土器外面整形は、刺突文直下より上が刷毛整形、下がへら整形である。さらに高坏は、浅い椀形の坏部で比較的長い脚よりもなるもので、口唇部に刻み目があり、口縁部上面には、坏下面に貫通する小孔が三つあけられているが、脚にはすかしはない。この高坏は丹塗である。高田式土器型式が中期前葉でも古い時期に比定されているので、これに次ぐ南方Ⅱ型式は、中期前葉の新しい時期と考えられる。

中期中葉の土器は、これまで知られている岡山地方の新邸式土器型式③、菰池式土器式④のもので、これまでにも南方各地で点々と出土し、中期中葉の標準的土器にもされている。この南方Ⅲ型式土器は、南方Ⅱ型式の櫛描文様の継続的展開が認められるものと、櫛描文が消退し、太目の刻み目貼付突帯や指頭圧痕貼付突帯文の盛行するものとに大別され。これらは前者の「古」と後者の「新」に細分されるようである。しかしその前後関係を含めて両者の対比、検討は、このたびの発掘で出土した中期中葉の土器片の全体的整理、分析を通じた上でのことであり、後日を期したい。

中期後葉の土器片の出土も全体的に少なく、明確な凹線文や、渦巻浮文はほとんど検出されなかったが、大部分が破片であるので判斷としがたい面が多い。

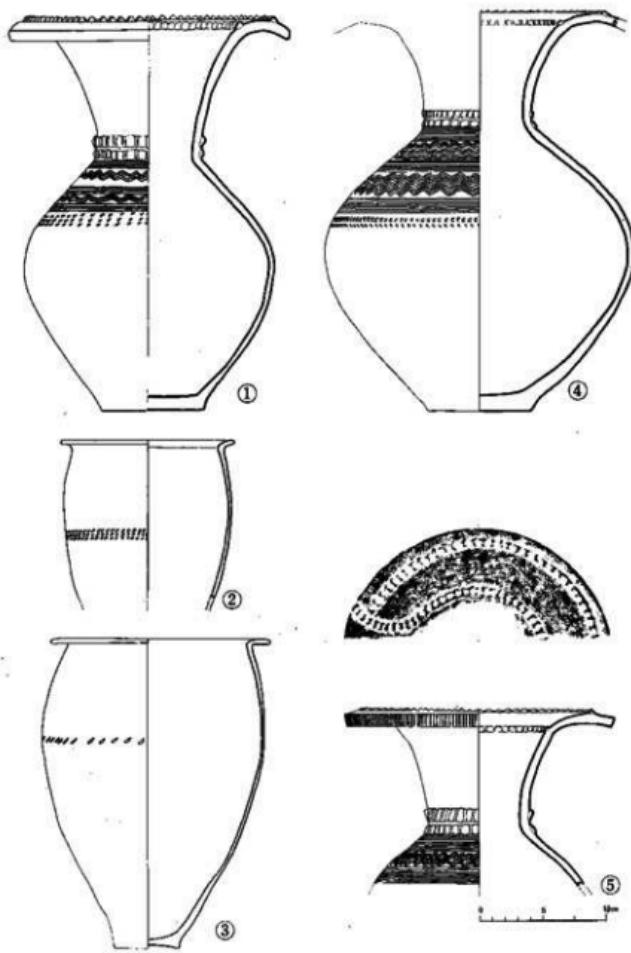
全体的な土器の出土状況は、前期中葉から後葉のものが少數であり、さらに中期初めの高田式の土器片の出土も少數であるのに対し、中期前葉、南方Ⅱ式の土器片は飛躍的増大を示し、南方Ⅲ式の土器片になると爆発的増加量で、出土土器片の70~80%を占めるであろう。しかし大半が破片密集状態で、個々の個体分に識別しがたい状況で出土したのも極めて特徴的である。これに対し、南方Ⅱ式の土器片は完形品をはじめとして、完形に近いものや、一括状態で出土するのがおうかった。



第26図 弥生式土器実測図

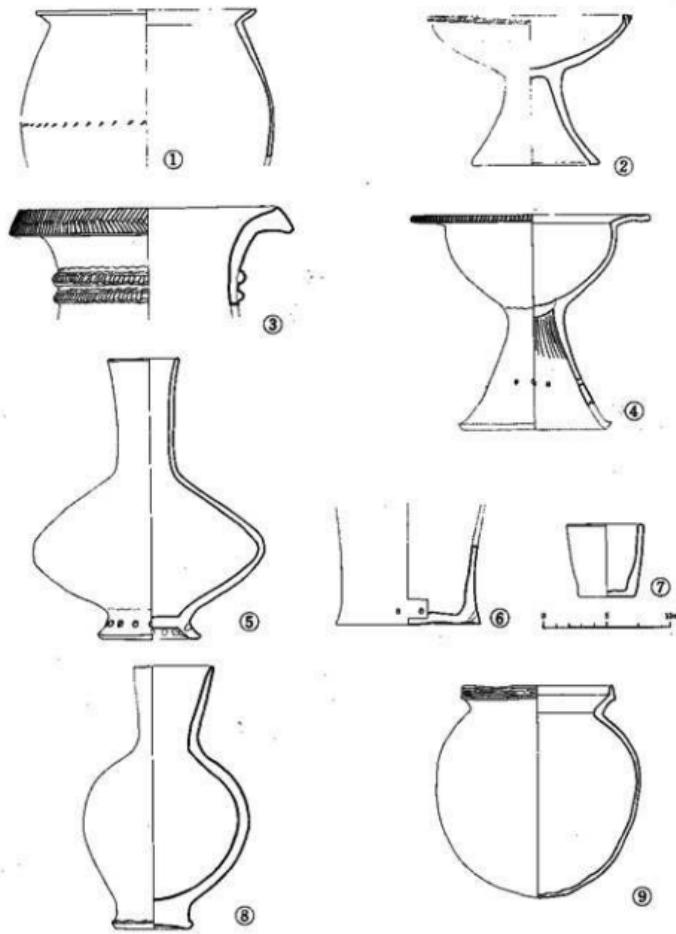
①～⑤、前一期

⑥⑦、中期前葉（南方Ⅱ式）（土塚墓および灰穴）



第27図、弥生式土器実測図

①～⑤、中期前葉（南方Ⅱ式）（土塙墓および灰穴）

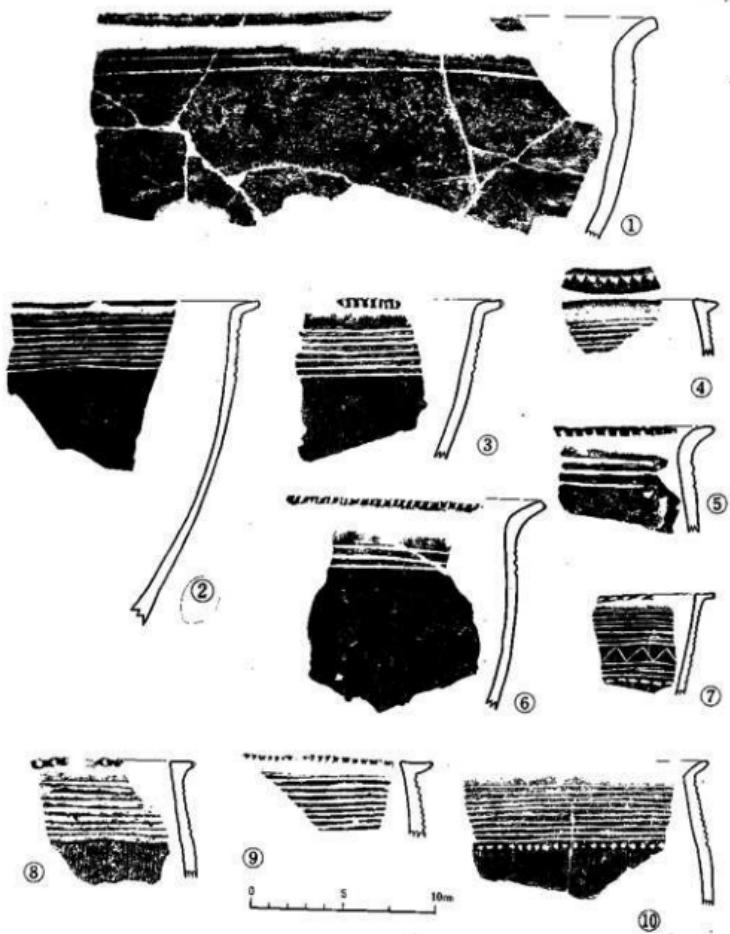


第28図、弥生式土器・土師器実測図

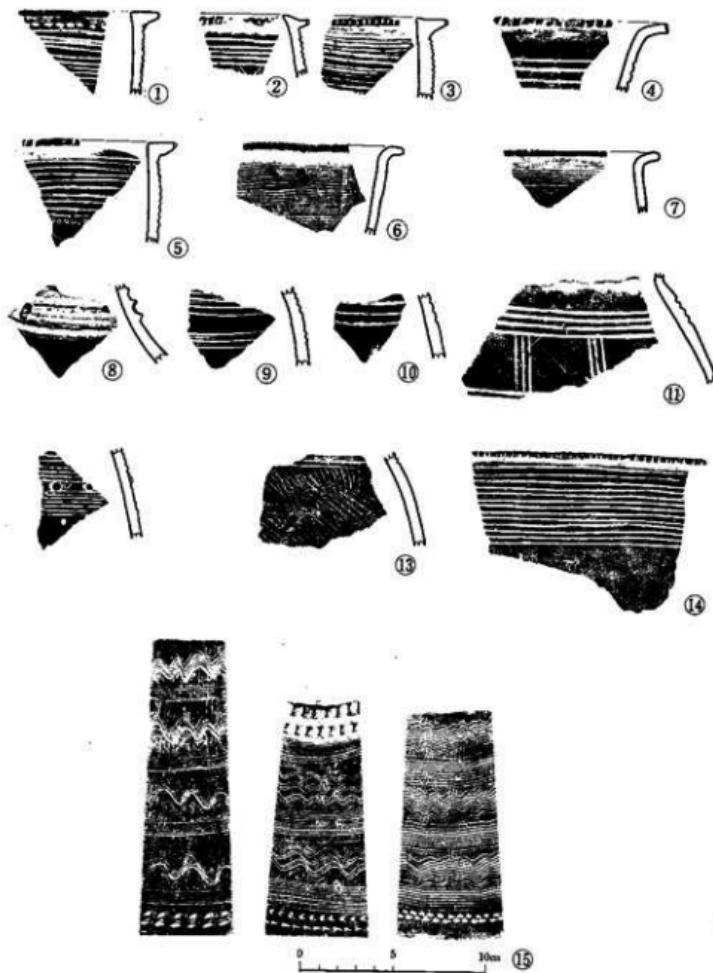
①、②、中期前葉（南方Ⅱ式）

③～⑧、中期中葉（南方Ⅲ式）

⑨、土師器



第29図、弥生式土器拓本 ①~⑩、前期



第30図、弥生式土器拓本

①～⑤、⑨～⑭ 前 期 ⑥、⑦、中期前葉 ⑧、中 期
⑯、中期前葉（南方Ⅱ式）

2. 分銅形土製品（第31図）

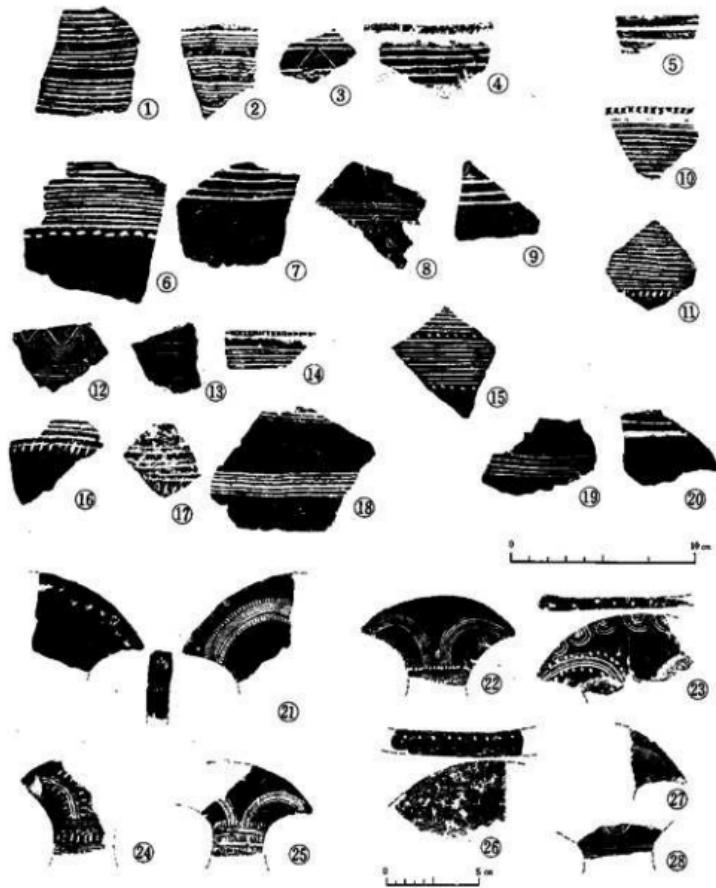
発掘を通して8個の分銅形土製品が出土したが、一例も完形のものではなく、全てが破片である。これらの分銅形土製品の表面の施文は、櫛描文と小刺突文列の構成による抽象的文様で中央から両側にそって噴水状に開く文様構成であり、文様表現がほぼ同一文様構成である。これらの分銅形土製品の表面周縁には、内に向って小さな櫛描半重弧文が点々とつけられ、上方にあたる部分には、裏面から小刺突孔がこの半重弧文に沿って貫通されており、一部のものには側方にも施されているものもある。出土状況は、3例が包含層中に混入状態で、3例が中期中葉的な比較的小さな灰穴に転入状態、さらに2例が第Ⅲ地点中央溝中の土器片溜の内に混入した状態で検出された。いずれもその出土状態は、破損投棄された状態で、灰穴から出土したものも堆積灰層上部に破損投棄転落状態であった。

3. 石 器（第32～36図）

発掘区全体から石鎌、石斧、石庖丁、石槍、石錐等の石器や、石核や剝片が多量に出土した。

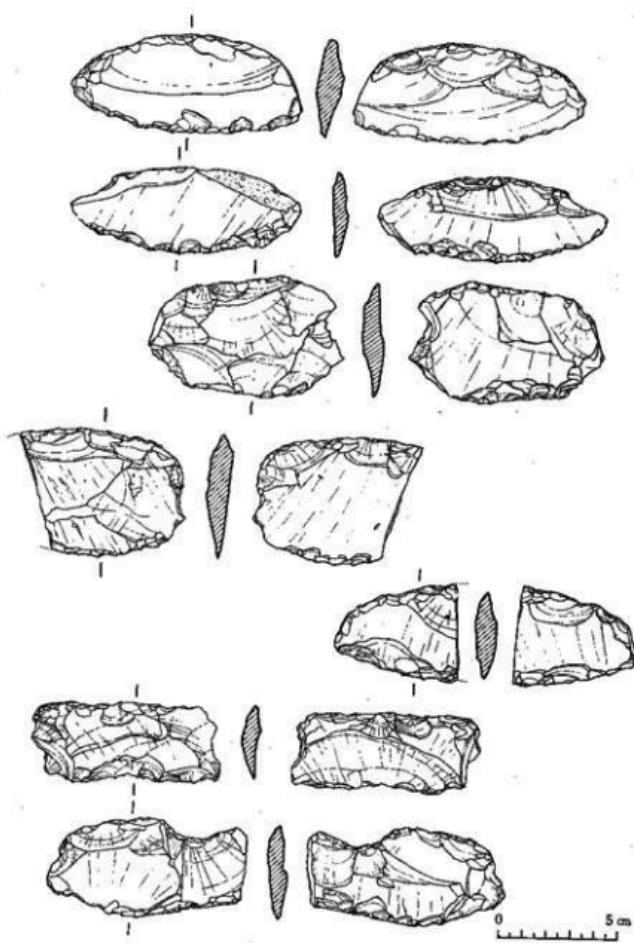
石鎌、全てがサヌカイトの打製石鎌で、形態的には、有茎、無茎に大部されるが、有茎のものは1例だけで、大部分は無茎のものである。無茎の石鎌は、基底辺の形状が、内湾するもの、外湾するもの、水平なものとの三種類に分けられ、さらに両刃部が内湾的なもの、直線的なもの、外湾的なものに分類される。また、その大きさから、長さ2.5cm程度以上の大形のものと同1.5cm程度以下の小形のものに分類される。出土した石鎌は、刃外湾基底辺内湾のやや形の乱れた小形のものが最も多く、刃外湾基底辺内湾の形の整った大形のものは少数であり、この状況は当時の使用目的の状態を多分に示唆する可能性が強い。石鎌の形状的变化を時期的なものとしては捕えられなかった。

石槍、サヌカイト製で完形品一例を含む3例が出土した。破片の2例は、横長の剝片を素材とした断面が長六角形を呈するものであり、香川県紫雲出遺跡出土の石槍⁽⁵⁾と同様のものである。完形品は、全長15.3cm、幅3.3cm、厚さ1.2cmで、両刃部からの剥離が中央部（鏑）以上に及ぶ断面形が凸レンズ状を呈し局部磨製が施されている。精巧なつくりのものである。この石槍は、基部が若干返り状にふくらみ、先端を残してあの両刃部が著しく磨滅している。この完形品は他の2例に比較して、形状、つくりが著しく異なり、単なる消耗品的な槍ではなかったことを示している。

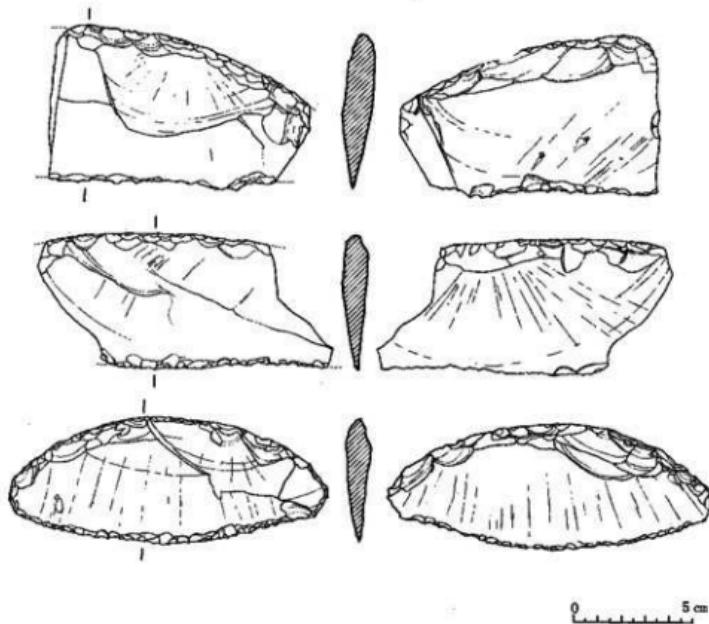


第31図、弥生式土器・分銅形土製品拓本

- ①～⑪, ⑭～⑯, ⑲, ⑳前期 ⑫, ⑬, ⑯, 中期 ㉑～㉘, 分銅形土製品
 ㉑, ㉒, ㉔, ㉕第Ⅱ地点, ㉓, ㉖第Ⅰ地点, ㉗, ㉘第Ⅲ地点)



第32図 打製石庖丁実測図



第33図 打製石庵丁実測図

石庵丁、磨製石庵丁の破片1例とサヌカイト製打製石庵丁が多数出土した。これらの打製石庵丁の大きさは、大小さまざままで、刃部が外湾するものと内湾するものとがあるが、内湾のものは少数である。大部分のものは背部を単に整形しているだけであるが、一部に紐掛けの凹部を側部に作っているものもある。これらの打製石庵丁には、著しい磨耗光沢が残り、一部のものには、再加工痕整形の認められるものもある。

石斧、磨製の扁平片刀石斧と太形蛤刃石斧、局部磨製の小形石斧等が出土していたが、大部分のものは破損が著しく、まさに真っ二つに折れているものもある。また小さな磨製指円柱状の一端に両刃を付けたノミ状のものが1例出土した。全体的な出土状況は点在的で少数であった。

その他

スクレーパー：サヌカイトの打製のもので、背部につまみ状突起をもつ石匙1例と、不定形剝片の一端に刃をつけただけのものとがある。前者の形状は破損したもののようにみえるが、両端の磨耗痕や加工痕から完形品と認められる。

石錐：サヌカイト打製のもので長さ3～4cmのものである。

石鍬：サヌカイト打製で上部両側に抉があるものであるが先端刃部が破損している。また、著しく磨耗痕を残す打製石鍬の刃部破片が一例出土している。

凹石：円盤状円礫の両面中央部に嵌部による円形凹痕があるもので、何にかの敲き台に使用されたものであろう。

敲き石：細長い円礫で、石器等を加工するために敲打したもので加工工具であろう。

4. 細形銅劍鋒

長さ2cm、幅1.6cmで、細形銅劍の先端部分だけの破損物であるが、刃部、鎧は完全に残り、断面は菱形を呈し材質、造りとも良好なものである。あるいは舶載品である可能性もあるが小片であるため判然としない。破損部分の断面の腐蝕状態から、破損はかなり古い時期におこなわれたと推定される。

5. 管玉

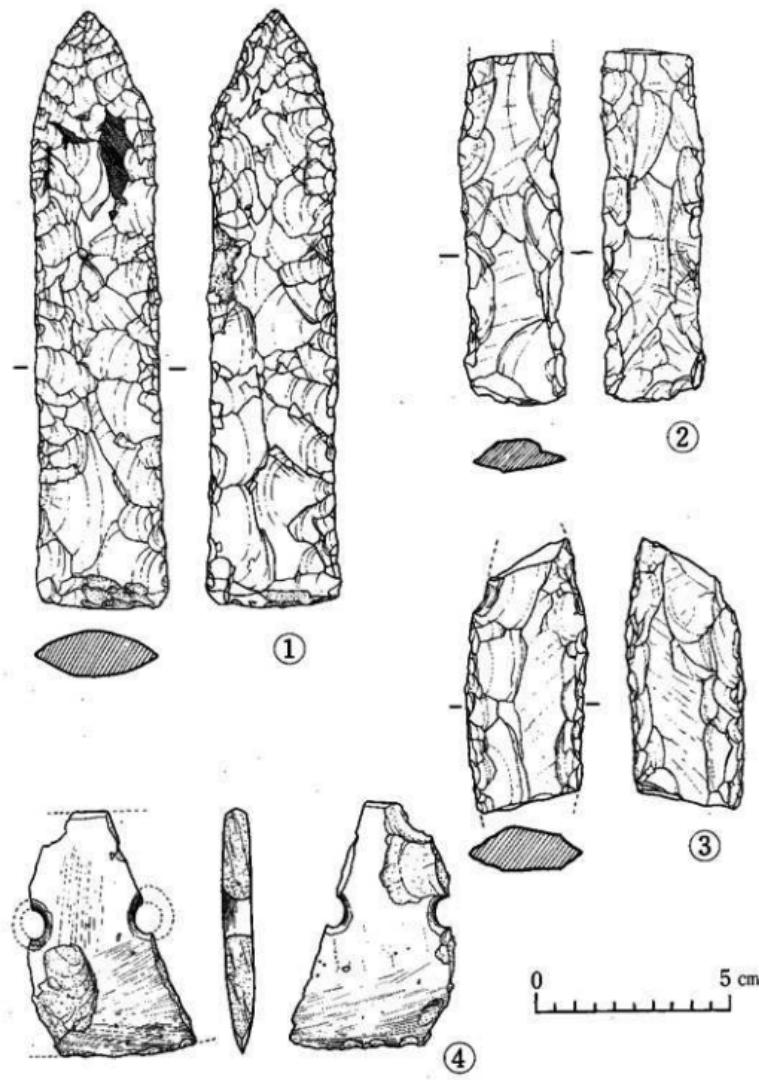
土塙墓にともなって6コと、包含層中より2コ出土した。石材は、碧玉製で細長いものであるが、径5mm程の太いものも混じっている。共伴土器は、南方Ⅲ式土器であり、出土状況は点在的である。

6. 土師器、須恵器

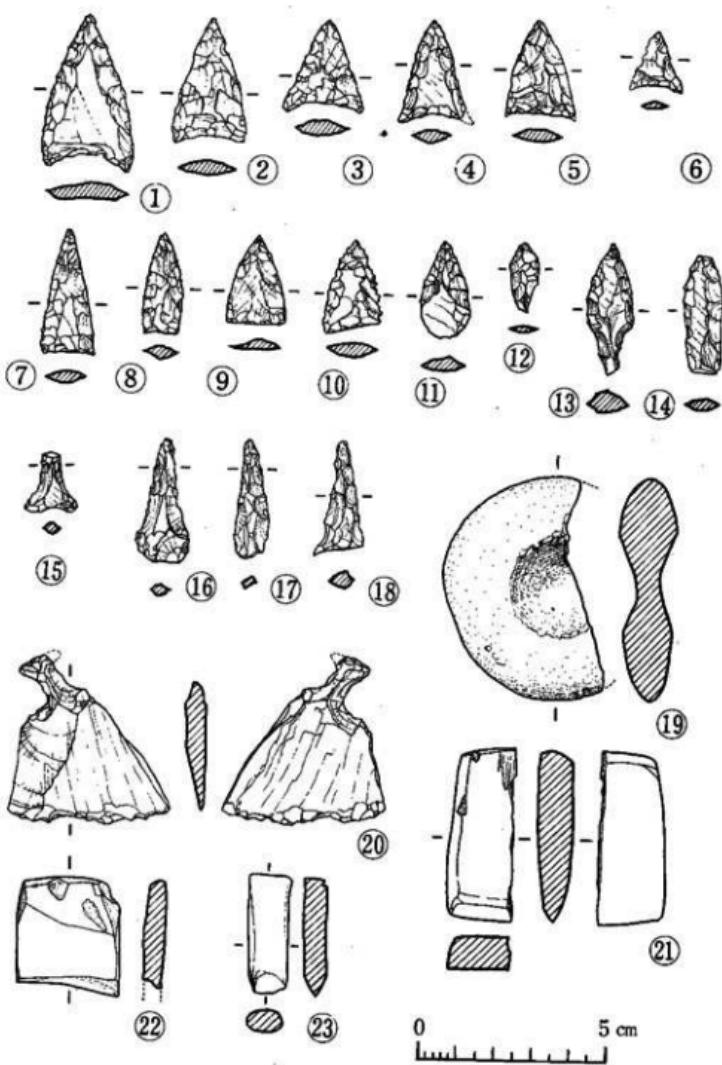
発掘区全体に、古墳時代の溝底部や、ピット底部が残っており、これらの内から点々と須恵器、土師器片が出土した。これらの内の一つから口縁部に櫛描沈線のある丸底の完形品の壺が出土し、4世紀頃のものと推定される。

7. その他

紡錘車：いずれも土器片の二次的転用で径が2.5cm～3cmのものと5cm前

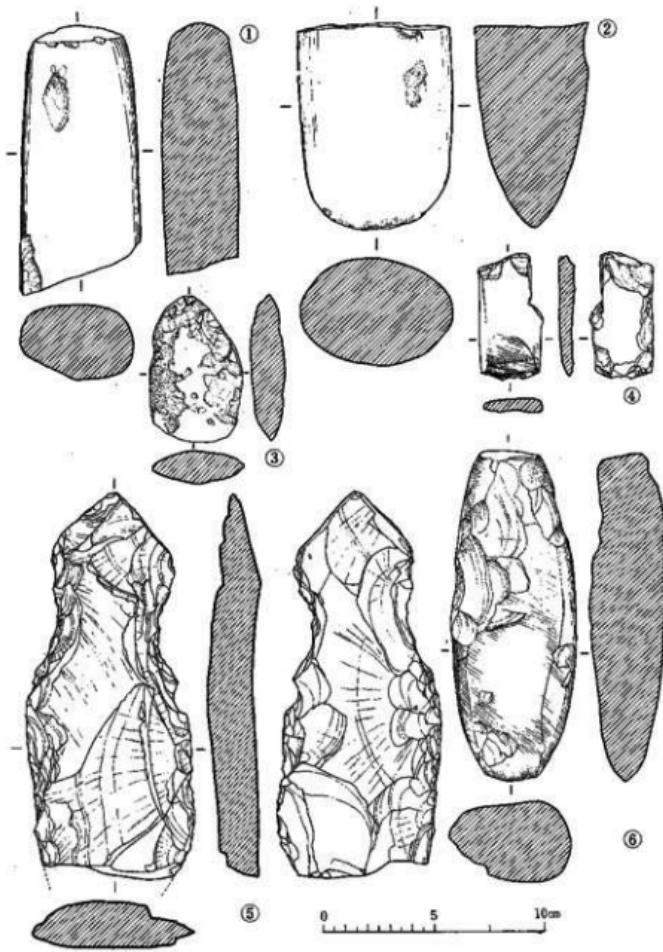


第34図 石器実測図 ①～③, 石槍 ④, 磨製石庖丁



第35図、石器実測図

- ①～⑯ 石鏃 ⑯～⑰ 石錐 ⑲ 凹石 ⑳ 石匙 ㉑、㉒ 扁平片刃石斧
㉓ ノミ状石器



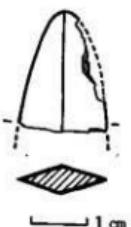
第36図 石器実測図

①②⑥ 磨製始刃石斧 ③ 小型磨製石斧 ④ 扁平片刃石斧 ⑤ 打製石砍

後のものとに大別される。

自然遺物、土括墓、灰穴に伴なって鹿の肩胛骨や、頭骨、角などが出土した。

(出宮徳尚)



銅劍鋒実測図

註①、鎌木義昌、近藤義郎「岡山県高田遺跡」『日本農耕文化の生成』、日本考古学協会編 1961年

註②、蓮田遺跡、宝崎遺跡等で発見された土器を含め、弥生時代前期の土器を「南方Ⅰ式」、中期前葉の土器を「南方Ⅱ式」、中期中葉の上器を「南方Ⅲ式」と仮称した。

註③、近藤義郎「備中新郡貝塚」『古代学研究第8号』古代学研究会 1953年

註④、鎌木義昌「山陽地方Ⅱ」『弥生式土器集成本編1』49頁、東京堂 1964年

註⑤、佐原真「第4章、石器、土製品、骨角貝製品、鉄製品」『紫雲出』78頁
鈴鹿町教育委員会 1964年

第5章 まとめて

このたびの市道変更予定地の発掘調査により南方遺跡を構成する遺構とその遺物の一部が明らかとなった。調査結果の全体的整理、分析、検討を踏まえれば、この調査結果は、弥生時代の解明に微細ながらも寄与する内容なり、事実を示し、さらには幾つかの問題提起をなしうるものであるが、現状での概要の一部は次のとおりである。

1. 土拵墓群

第Ⅰ地点から第Ⅱ地点北部にかけて弥生時代前期後葉から弥生時代中期中葉～後葉初めにかけての墓地が検出されたが、これらはいずれも土地を掘り込んだだけのもので木棺の使用は認められない。墓域内の土塙墓は、全体的に幾つかのグループに分けられ、それぞれのグループが累積的な墓群を形成する。各群自体にはあまり格差が認められないが、一部の群では多量の土器の供獻的状態の出土が認められるものもあり、この群には中期中葉以降管玉の副葬も認められる。いずれにせよこの墓域は、その形成時期から意識的に分離されていたようで、中期中葉末には狭い溝で区分されていた。

2. 細形銅劍

土塙墓群の一部から出土したもので、出土状況から副葬品であったと推定される。しかし、出土した土塙墓と他の土塙墓との質的格差はなく、一墓群中の一基にすぎなく、同じ墓群の土塙墓も、他の墓群と基本的には同一のものである。

3. 灰穴遺構

不定形な掘り込みで、内部に多量の灰、焼土が堆積しているが、これらは直接この土塙で形成されたものでない。内部から、完形に近い土器や、獸骨が多く出土する。第Ⅰ地点から第Ⅱ地点にかけて分布し、その規模は前期のものから、中期前葉のものにかけて拡大し、以後縮少しながら多量化する動向にある。内容、状況からみて、多分に祭祀関係遺構と考えられる。

4. 南方Ⅱ式土器

高田式土器型式に次ぐと考えられる櫛描文様を主体とする土器形式であり、これまで断片的にしか知られていなかったもので弥生時代中期前葉の後半に比定される。これにより、岡山地方の弥生時代中期の編年が一応揃うこととなった。

5. 分銅形土製品

発掘区域全体から8個の分銅形土製品の出土をみたが、全ては破損したものを投棄した状態である。しかし、同一発掘地点からのこれだけの出土例はこれまで例のないことで、南方遺跡の内容、性格を示唆する一指標的なものであろう。

6. 石器

石鎌、石庖丁をはじめとして多量の石器の出土をみたが、特に石庖丁には著しい使用痕が認められる。石器の多量出土に対し鉄器は全然検出されず、使用具の主体が、まだ石器に依存していたことを示す。

7. 埋葬遺体

三体のほぼ完全な遺体が検出され、1体は40才代の男性、1体は20才前後の女性、1体は不明であり、2体が上向伸展葬で、1体が横向屈葬であった。これらの人骨には、抜歯等は認められなかった。

いずれにせよ、発掘調査の結果、南方遺跡は、弥生時代前期中葉から形成され始め、中期前葉に至って飛躍的形成を示し、さらに中期中葉に至ってその頂点に到す。中期後葉以降については遺物の出土が少なく判然としないが、この微高地は、かなり安定したよう引き続いて遺跡が形成されていたようである。

水田造構等の直接生産の場は、発掘区域内から発見されなかつたが、多数の石庖丁の出土とその著しい使用痕からみて発掘地域の近くに存在していたことは明らかである。また多量と小形石鎌の出土は、その殺傷能力からみて弓矢が対人的武具でなく狩猟用のものであったことを示し、当時の生産において農耕以外に狩猟にも一部のウエートをおいていたことを示すものであろう。

また分銅形土製品の多数の出土や、細形銅剣を副葬した墓の存在などからみて、この南方遺跡は、当時の近接集落に対して勢力をもつた集落で、弥生時代中期の岡山平野に於ける農業共同体の一中心核的存在であったと考えられる。

いずれにせよ、発掘地点からは数々の重要な遺構や、貴重な遺物が多数検出され、南方遺跡の内容、様相、性格などの一部が明らかになり、この遺跡の重要性が判明した。しかし、その反面この調査の前提からこの地点の遺跡は永久に消滅してしまい、實に惜念の至りである。

発掘調査結果の全体的整理、検討に基づく発掘地点の遺跡の内容、性格、様相等詳細な報告は、今後を期したい。

なお、このたびの発掘は、工事工程により時間的制約と調査員の絶対的不足が相俟って必ずしも充分な発掘調査であったとはいいがたい。特に各遺構個々の発掘進行過程に於ける状況の変化や埋積状態変遷の把握は、調査員自らが発掘するか、追求的目的意識を持つものが、発掘をしないかぎり的確にはおこないえない。また、微細なことがらであってもその遺構の性格を本質的に決定するような状況の変化、未知の状況の出現に充分に対応もしえないであろう。この意味でもすべての遺構を的確に調査したとは必ずしもいいがたく、遺構に対して自責の念を禁じえない。

いずれにせよここに遺跡は消滅した。

(出 宮 徳 尚)

あとがき

新幹線の敷設という国家的事業に協力する国民としての責務と、文化財保護についての国民的課題はいずれも重要であり、二者択一は不可能である。

われわれは、この合一点を求めて苦腦しながら作業をすすめてきた。

担当の出宮主事はこうしたなかで本当に時間をこえて努力し、調査と報告書の作成の中心になって努力していただいた。県教委のご指導、力添えをいただいた方々に厚くお礼を申しあげるしだいである。

この報告書によって埋没した南方遺跡の姿をしのんでいただければ幸である。

文化財の保護という困難な課題が少しでも解決していくことを願いながら.....。

昭和46年3月20日

岡山市教育委員会社会教育課長

松本 猛

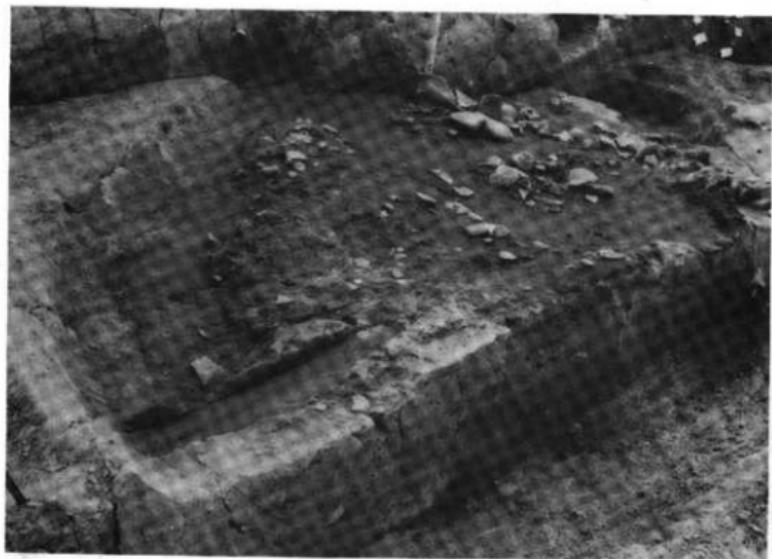


① 発掘区全景



② 発掘区全景

図版第2 遺構



① 第I地点、G r N 10灰穴遺構上面遺物出土狀況



② 同 上



① 第I地点, G r N 10灰穴遺構上面遺物出土状況

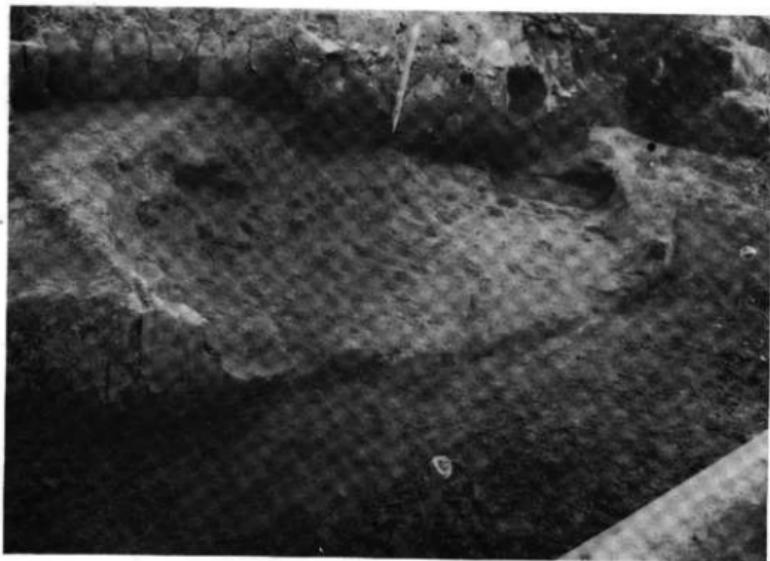


② 第I地点, G r N 10灰穴遺構底面

図版第4 遺構



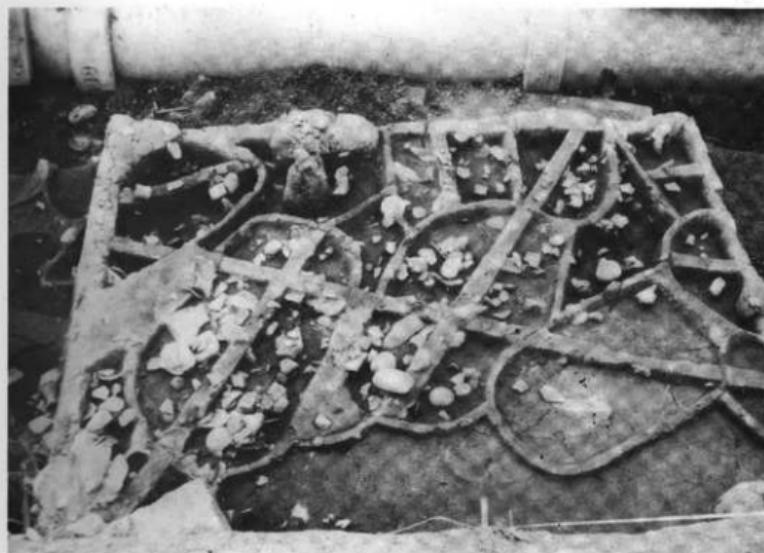
① 第I地点, Gr N 10灰穴遺構底面



② 第I地点, N 10灰穴遺構底面

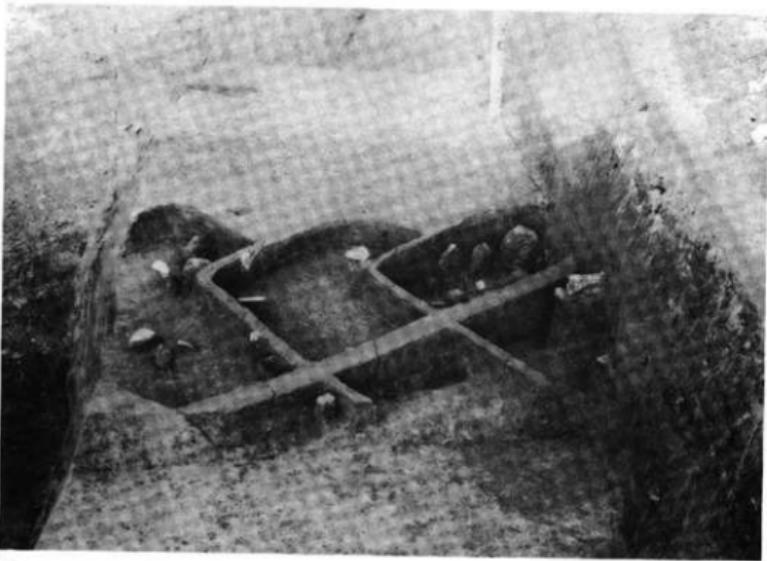


① 第Ⅰ地点、Gr N 10土塙墓群上土器出土状況



② 第Ⅰ地点、Gr N 10土塙墓群

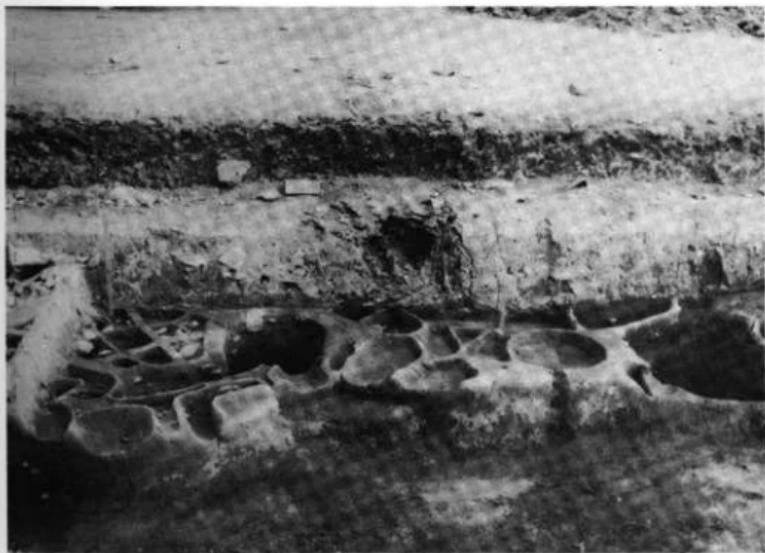
図版第6 遺構



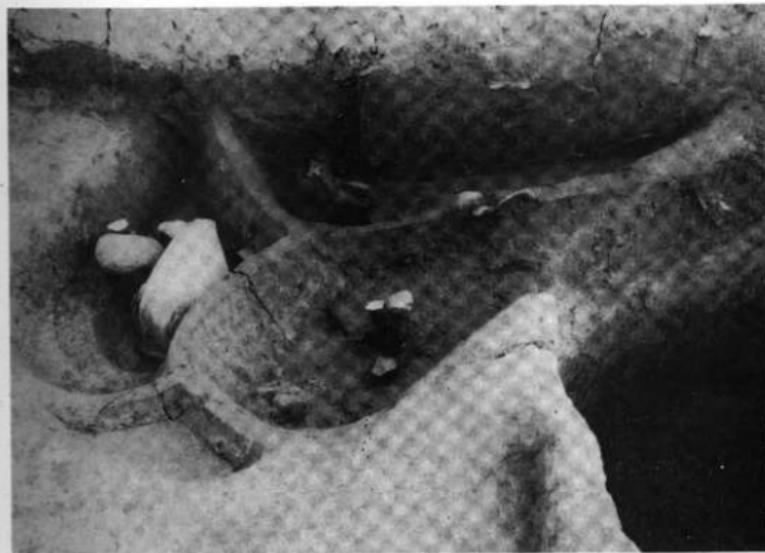
① 第I地点, Gr N18土塙墓



② 第I地点, Gr N 8 土塙墓群



① 第I地点, Gr N 5~8 土塚墓群



② 第I地点, Gr N 5 土塚墓

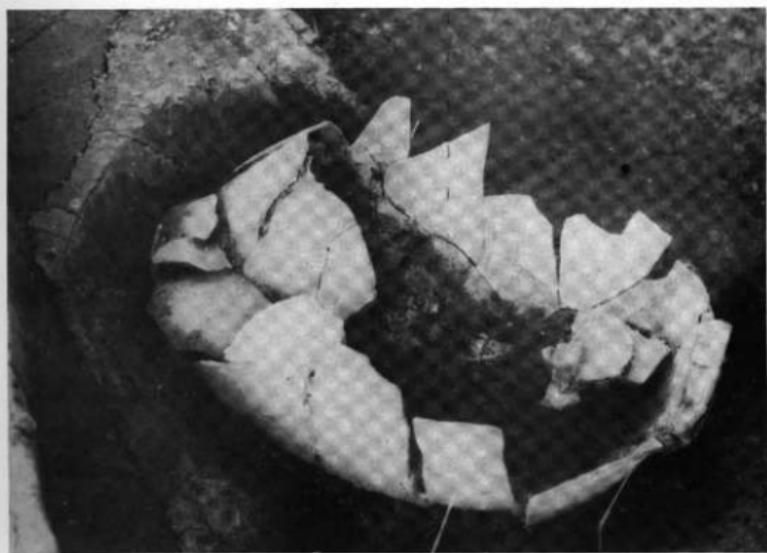
図版第8 遺構



① 第Ⅰ地点、Gr N 2 土塚墓



② 第Ⅰ地点Gr N 1 土塚墓内鹿肩胛骨出土



① 第I地点、Gr S 12斂棺

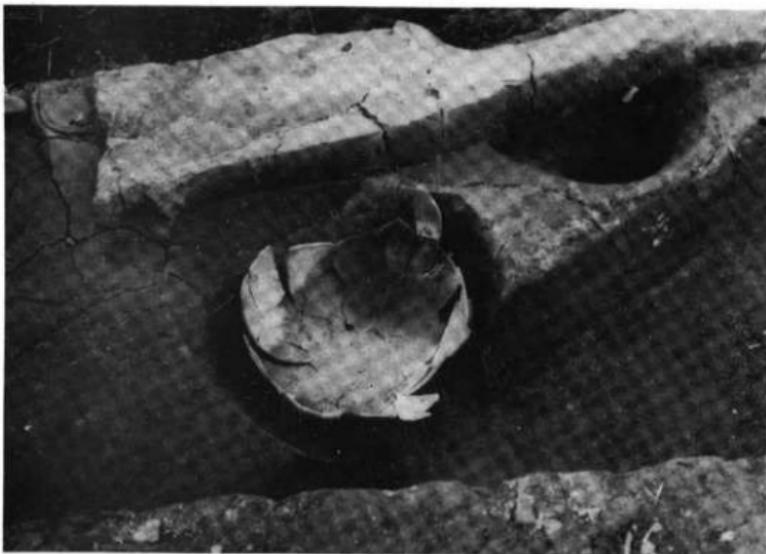


② 同 上

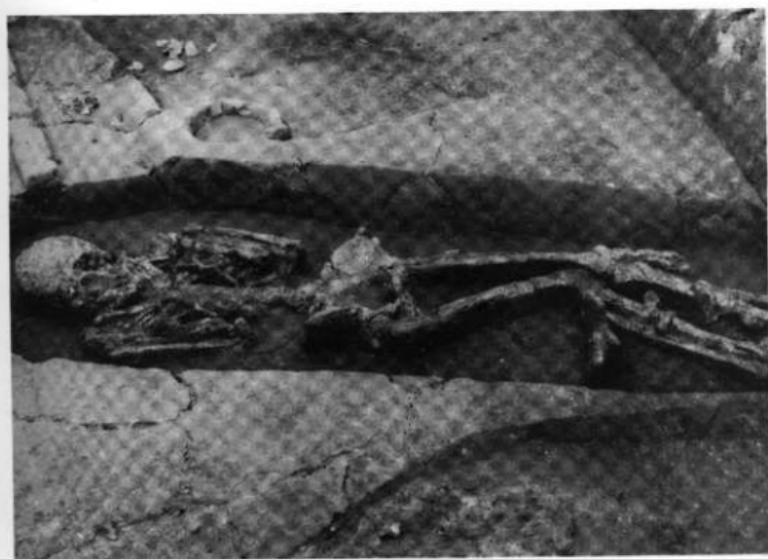
図版第10遺構



① 前同甕棺内小兒骨



② 前同甕棺



① 第I地点、1号人骨土塚墓



② 同上

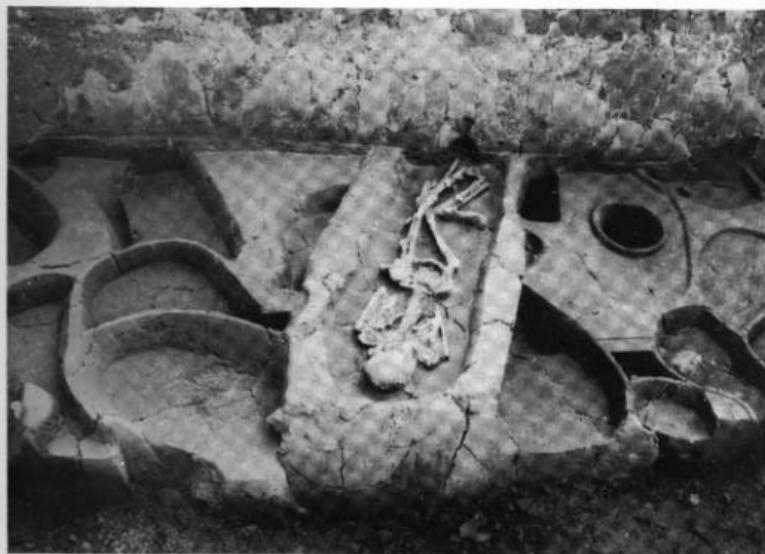
图版第12遺構



① 第I地点 2号人骨土塚墓



② 第I地点，3号人骨土塚墓



① 第Ⅰ地点、1点人骨土塋墓付近土塙墓群

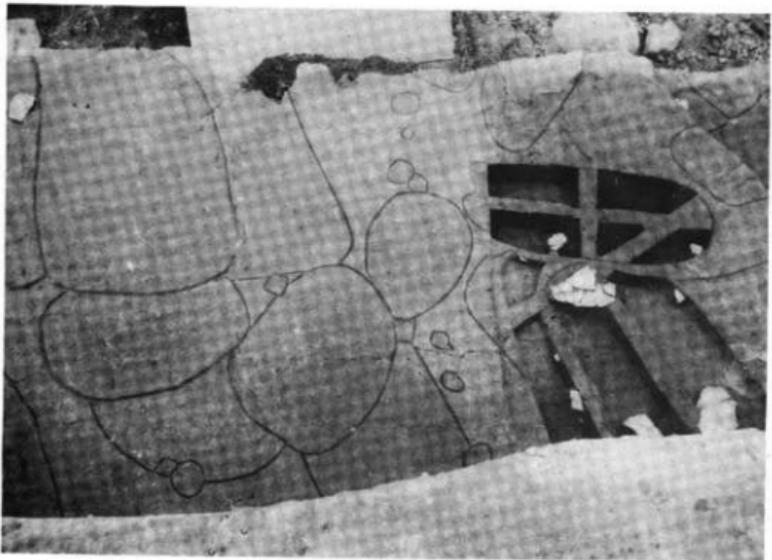


② 第Ⅰ地点、第1号人骨、第2号人骨土塋墓

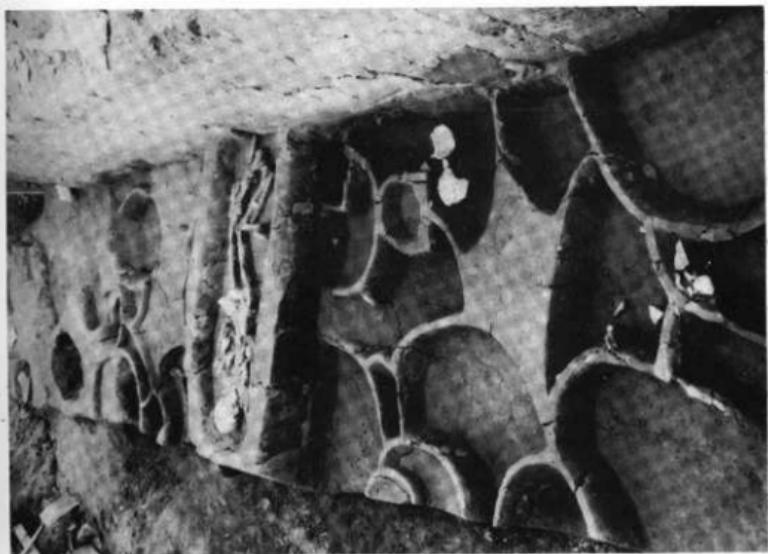
図版第14遺構



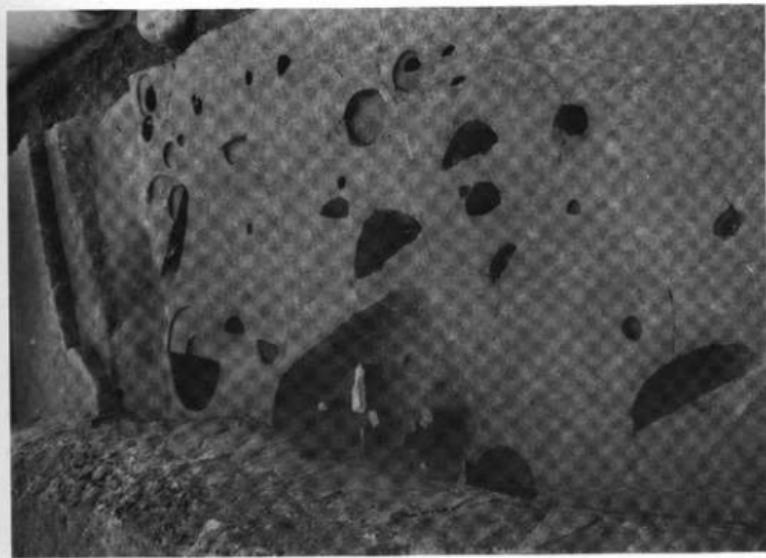
① 第I地点1号人骨、2号人骨土塙墓



② 第I地点G r S 8土塙墓群

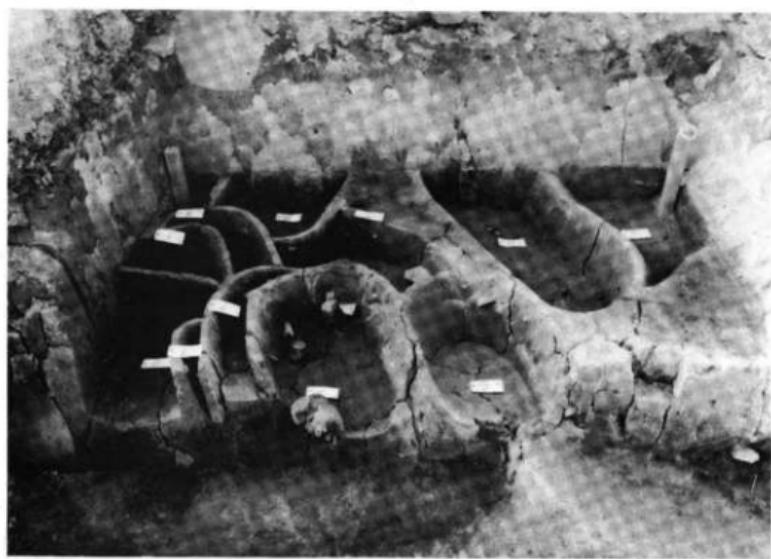


① 第1地点、G^r S^r 13~17 土松藻群



② 第1地点、G^r S^r 2~5 上群

図版第16遺構



① 第I地点、西G r S'15 上埴墓群



② 同上 下部



① 前 同 (銅劍出土土塚墓)

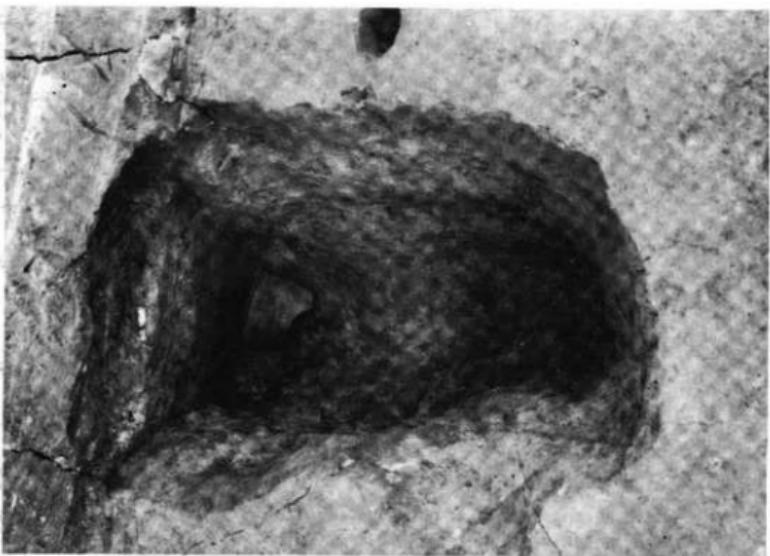


② 第I地点西壁北端土器出土状況

図版第18遺構



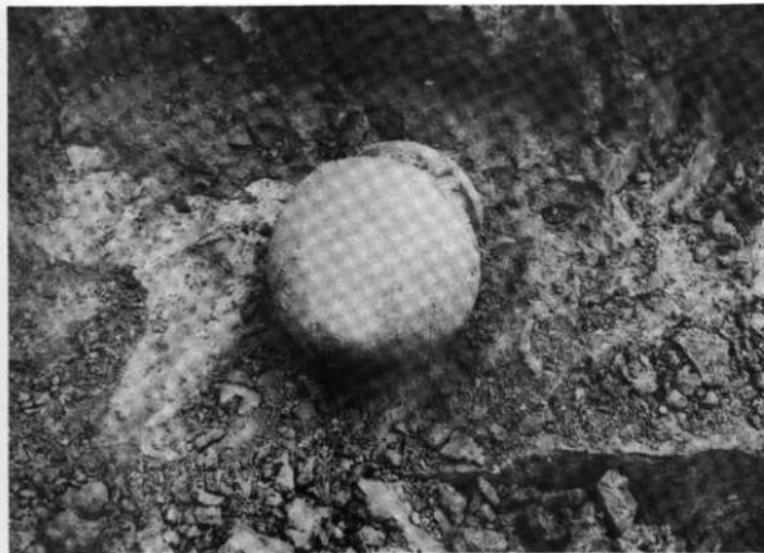
① 第Ⅰ地点、西壁上器出土 状況



② 第Ⅰ地点、G r S 12土坑内前期土器出土状況

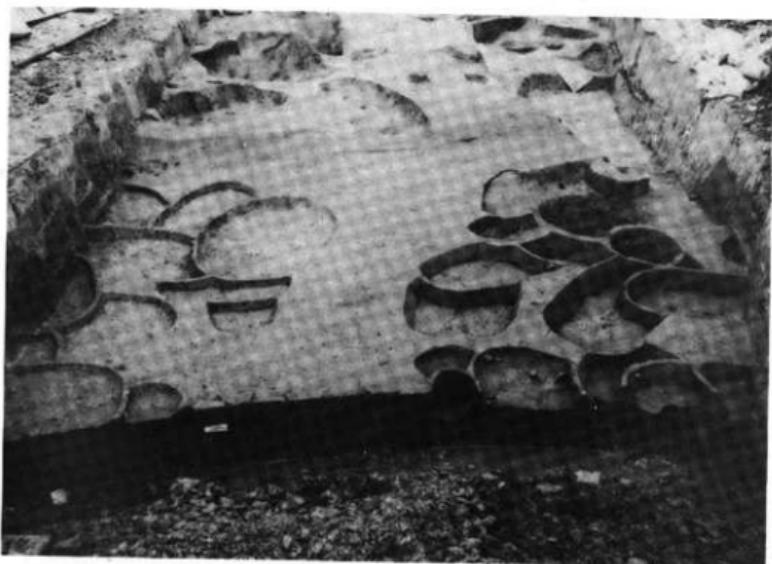


① 第Ⅰ地点、土器出土状況

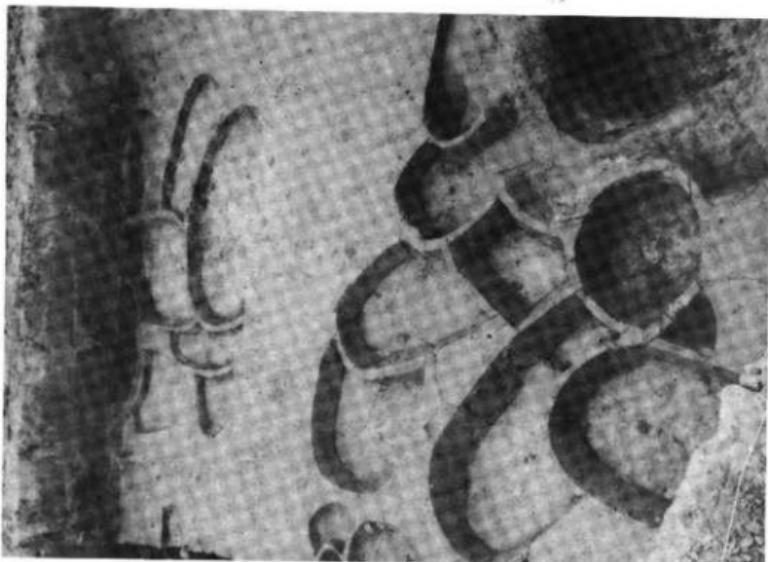


② 同 上

図版第20造構



① 第Ⅰ地点G r S 20土塙墓群



② 同上